

学びの質を高める授業改善プロジェクト事業

学びの質を高める 授業スタンダード

実践編



令和3年3月
青森県教育委員会

本書について

実践編の概要

県教育委員会では、令和元・2年度学びの質を高める授業改善プロジェクト事業において、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を通して質の高い授業を実践するための手引きとなる「学びの質を高める授業スタンダード」を、令和2年3月に策定し、県内公立小中学校の全教員に配布しました。

本書は、その「学びの質を高める授業スタンダード」に基づく授業実践に取り組んだ小中学校の授業スタンダード検討委員による事例を紹介したものです。

また、本事業では、学校図書館等の活用推進を図る取組も行っており、教科指導等において学校図書館等を有効活用した事例を併せて掲載しています。

使用に当たって

- 主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業で全てが実現されるものではありません。本書に掲載されている事例は、「学びの質を高める授業スタンダード」に示している学習過程の中から学習のねらいや児童生徒の実態に合わせて重点的に取り組む学習活動を取り入れた実践が掲載されています。
- 各事例は当該校の実態に応じた取組となっています。各学校の児童生徒の実態や各地域の実情に応じて、事例の一部を取り入れたり指導内容を追加したりするなど工夫して活用してください。
- 県教育委員会では、本冊子を含め授業改善に向かうためのハンドブックをこれまで3冊発行してきました（右図）。授業づくりの一つの指標として、先生方の手元に置いて校内研修など様々な場面で話題としてください。

事例紹介のページ構成① 「学びの質を高める授業スタンダードに基づく実践事例」

学びの質を高める授業スタンダード P14-15

1 I (1) 小学校国語科 第5学年 単元名「伝記を読み、自分の生き方について考えよう」6/7

■単元及び題材について
本教材は、児童になじみのある「アンパンマン」の作者である「やなせたかし」の伝記であり、児童が興味関心をもって学習に取り組むことのできる教材である。一次で学習の見通しをもった後、二次では、主人公の生き方が分かる「出来事」や「言動」を見付けさせる。そこから「生き方」を捉え、「自分の生き方に取り入れたいこと」につなげていくことで、自分のこととして受け止め、そこから「次はこの本を読んでみたい」という読書意欲も高められると考えられる。
二次での読み取りの学習を生かして、三次では、自分が選んだ伝記の人物の読み取り、友達に紹介する伝記シートを創り上げていく活動を取り入れる。

■本時のねらい
興味をもった偉人(伝記の人物)の生き方をワークシートにまとめ、同じ偉人を選んで仲間と読み比べ、話し合う活動を通して、自分の考えを更に深めることができる。

2 ■主体的・対話的で深い学びの視点
A 登場人物に起こる出来事とその意味、言動、心情をワークシートに整理して書かせる。【興味や関心を高める】
B 登場人物の「生き方」から「自分の生き方に取り入れたいこと」を考えながら読ませる。【自分と結び付ける】
C 伝記から読み取ったことと自分自身のことを関わりさせながら考えたことを読み取り伝え合う。【互いの考えを述べ、比較する】
D 自分が選んだ本を読み、オリジナル伝記を書かせる。【新たなものを創り上げる】

3 ■授業場面より
■教材との出会い・課題設定
①つかむ ②見通す
■見通し・追究・解決
③情報を把握・検討・精査する ④考えをもち・表現する

A【興味や関心を高める】
それぞれが見付けた、その人物の生き方が分かる「出来事」「言動、心情」と、そこから考えた「生き方」を書き、「自分に取り入れたいこと」が明確になるよう、表形式のワークシートの縦の項目にまとめることにしました。
例えば、「初めは大人たちにアンパンマンが不評だった(出来事)が、それでも子供たちのために書き続けたこと(言動)から、自分が正しいと思ったことを貫ける人(生き方)だと思った。」というように、表にまとめた際に「出来事」「言動、心情」「生き方」と上から順番に明らかにしながら自分の考えを伝えることができました。

B【自分と結び付ける】
教材文を読むときも自分が選んだ伝記を読むときも「生き方」が分かる「出来事」にはペン色の付箋、「言動、心情」には青の付箋を貼るという工夫をしました。そうすることで、「自分に取り入れたい生き方」を初めから意識しながら読み取ることができました。

4 ■見通し・追究・解決
⑤交流する ⑥まとめる
■まとめ・振り返り・新たな学び
⑦振り返る ⑧広げる

C【互いの考えを述べ、比較する】
「ほくも〇〇さんが見付けた『出来事』『言動、心情』を選びました。」「わたしは、〇〇さんと同じ『出来事』のところに目をつけましたが、〇〇さんと違って、～という『生き方』だと考えました。」というように、自分の考えを班で伝え合い、班のワークシートにまとめ、比較しながら考えました。
その際、拡大した表を使って考えを伝え合い、友達の見通し自分のワークシートにメモさせました。同じ人物を取り扱っていても、それぞれ取り入れたいことは違うことが分り、伝え合うことで、一人一人が考えを深めることができました。

D【新たなものを創り上げる】
やなせたかしの伝記で学習したことを基に、自分たちで選んだ伝記の人物について、伝記シートにまとめ、友達に紹介する活動を設けました。自分たちで選んだ人物も同じ形式のワークシート、同じ学習の流れで行ったので、児童が意欲的に学習に取り組んでいる様子が見られました。

5 ■2年間の授業実践を通して
6 これまでの指導事例から
7 成果と課題

1つかむ(学び方を知る)
第二次で学習した伝記の読み方、「生き方」[自分に取り入れたいこと]を見付けて書く活動を、そのまま第三次でも取り入れた。伝記の学習は今回初めてだったため、学び方を知った上で、次の活動に見通しをもって取り組むことができた。

2交流する(拡大表の活用)
「出来事」「言動、心情」「生き方」と3色の付箋を使って、席を移動しながら自分たちの考えを話し合わせるようにしたことで、促している考えや違う考えを整理しながら話しやすくなることができた。
また、拡大した表に整理する活動では、見出しを付けて整理することで、短く、分りやすくとまとめる力も付けることができた。

3振り返る(文章構成図を使う)
説明文の授業で、段落と段落の関係を文章構成図に表す活動を取り入れ、学習が進むごとに文章構成図を書き足していった。振り返り時に本時で完成した文章構成図を想い起せることで、文章の構成がよく分かるだけでなく、次時への意欲が高まり、「読む必要感」が芽生えていた。

4広げる(伝記シートの作成)
自分で選んだ人物の伝記シートを同じ学級の友達に紹介するだけでなく、隣の学級にも紹介し、「次は、この本を読んでみたい。」という読書への意欲も高めることができた。

5成果
⑤交流する」では、自分の考えを発表して終わるのではなく、疑問に思うことを問いながら話し合い、多様な考えがあることよきを感じることができたため、自分の考えを発展、深化させる力を高めることができた。
⑦情報把握・検討・精査する」では、既習したことを生かして、「生き方」が分かることを意識しながら読む力が付いた。
⑧説明文の学習では、オリジナル辞典をつくり、意欲的に意味調べをする児童が増えた。自分だけの辞典をつくることで、積極的に意味を調べ、言葉分類し、自然に語彙力を身に付けることができた。

6課題
⑧第二次から第三次が分断されることなく、スムーズな学習の流れをつくる必要があったと感じた。そのためにも教師が児童に学習のゴールを明確にさせること、何のために、どんな力を高めるためにこの学習をするのかといった必要感をもたせることが大切である。
⑧活動の手順を教師が丁寧に確認しすぎたので、その時間を省いて、児童がじっくり教材と向き合う時間を確保し合う時間を確保する必要がある。
⑧話し合いの際、「何を話し合わせるのか」「どう深めさせるのか」といった内容の精査、視点のたたき合わせが大事である。

- ① 単元名/単元・題材について/本時のねらい
② 主体的・対話的で深い学びの視点
③ 授業スタンダードに対応した学習過程
④ 教師の働きかけや子供の様子
⑤ 授業スタンダード対応ページ
⑥ その他の指導事例
⑦ 実践を通しての成果と課題

事例紹介のページ構成② 「学校図書館を活用した実践事例」



これまでのハンドブック 3冊

III (1) 小学校国語科 第2学年 単元名「そうぞうしたことを、音読げきであらわそう」 6/12

1 ■ 単元及び題材について
本単元は、物語の心に残った場面について、音読劇を発表し合う活動である。「登場人物になりきる」という児童にとって分かりやすい視点を与え、登場人物に同化して読むことを促し、叙述や挿絵から分かること、またはそこから想像したことを音読と動き（人物同士の位置、簡単な動きなど）に表せるようにしたい。その際、人物の行動や会話の叙述の中から、気持ちを表すための言葉や表現に着目して考えさせ、人物の悲しみ、優しさの理由を説明させる活動を行うようにする。
教材文とともに、「ふたりは」シリーズの作品を取り上げ、並行読書教材として用いる。「お手紙」と同じ登場人物の物語を読むことは、読書の楽しさを味わうきっかけとなる。また、人物の行動や会話に表れる優しさ、ユーモアなどについて、「お手紙」との共通点や相違点を話し合うことで、登場人物の関係性を考えていくことにもつながると考える。

■ 本時のねらい
手紙のことを言ってしまうかえるくんの優しさと、手紙の内容を知ったがまくんの喜びについて話し合うことにより、人物の行動や様子を想像しながら、2人の「とてもしあわせな気持ち」の理由を書き分けることができる。

2 ■ 学校図書館活用の視点・工夫
・単元学習中、目的意識をもって主体的に読むことができるよう、本校学校図書館、学級文庫では足りない冊数を市民図書館から借り、児童数分以上を確保して教室に常備する。
・複数の本文や文章を関係付けて読み、教材文だけでは見えてこない登場人物の人物像や関係性を捉えることができるよう、「やさしさを見つけて読む」という視点をもたせてシリーズ作品を紹介する。
・友達の読書に対する態度に影響を受けたり、読書後の感想を交流する機会を増やしたりするために、並行読書の記録や感想をブックリストに記入する。

3 ■ 授業の実際

■ 授業の流れ	■ 学校図書館活用の視点・工夫、児童の取組
<p>【前時までの流れ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音読劇を見せ合うという単元のゴールを確かめ、人物の行動や心情についての理由を叙述や挿絵を根拠にして話し合い、自分の考えをまとめる。 <p>【本時】</p> <ul style="list-style-type: none"> 導入 <ul style="list-style-type: none"> 前時で学習した場面のかえるくんの優しさと学んだ読み方を想起する。 展開 	<ul style="list-style-type: none"> 並行読書との関連 教材文「お手紙」の人物が優しいことから、優しさを見付けながら並行読書教材を読み、ブックリストに記入することを確かめる。 前時の学習や人物像を想起するために、前時の振り返りやブックリスト 

4

- ① 単元名／単元・題材について／本時のねらい
- ② 学校図書館活用の視点・工夫
- ③ 授業の実際
- ④ 教師の働きかけや子供の様子

事例紹介

I 学びの質を高める授業スタンダードに基づく小学校の実践例

(1) 国語科 第5学年 「伝記を読み、自分の生き方について考えよう」 6/7	2
(2) 国語科 第6学年 「筆者の意見について考えたことを伝え合おう」 6/9	4
(3) 社会科 第3学年 「火事からくらしを守る」 7/8	6
(4) 算数科 第5学年 「単位量あたりの大きさ」 2/4	8
(5) 理科 第4学年 「自然の中の水」 8/10	10
(6) 外国語科 第5学年 「ふるさとメニューレイを使って買い物しよう」 6/8	12

II 学びの質を高める授業スタンダードに基づく中学校の実践例

(1) 国語科 第2学年 「いにしへの心を訪ねる」 5/5	14
(2) 社会科 第2学年 「日本の諸地域 北海道地方」 5/6	16
(3) 数学科 第3学年 「円周角」 10/10	18
(4) 数学科 第2学年 「データの比較」 5/6	20
(5) 理科 第2学年 「電流と電圧」 2/6	22
(6) 外国語科 第3学年 「Lesson6 Interesting Languages」 3/7	24

III 学校図書館を活用した実践例

[小学校]	(1) 国語科 第2学年 「そうぞうしたことを、音読げきであらわそう」 6/12	26
	(2) 国語科 第1学年 「たのしんで本をよもう」 13/15 他	28
	(3) 国語科 第2学年 「想像をふくらませて、お話を書こう」 4/10	30
[中学校]	(4) 外国語科 第3学年 「Chapter4 自分の意見を言おう」 10/14	32
	(5) 社会科 第3学年 「地方自治とわたしたち」 4/6	34
	(6) 国語科 第2学年 「論理を捉えて」 7/7	36

■ 単元及び題材について

本教材は、児童になじみのある「アンパンマン」の作者である「やなせたかし」の伝記であり、児童が興味関心をもって学習に取り組むことのできる教材である。一次で学習の見通しをもった後、二次では、主人公の生き方が分かる「出来事」や「言動」を見付けさせる。そこから「生き方」を捉え、「自分の生き方に取り入れたいこと」につなげていくことで、自分のこととして受け止め、そこから「次はこの本を読んでみたい」という読書意欲も高めることができる。と考える。

二次での読み取りの学習を生かして、三次では、自分が選んだ伝記の人物の読み取り、友達に紹介する伝記シートを創り上げていく活動を取り入れる。

■ 本時のねらい

興味をもった偉人(伝記の人物)の生き方をワークシートにまとめ、同じ偉人を選んだ仲間と読み比べ、話し合う活動を通して、自分の考えを更に深めることができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 登場人物に起きる出来事とその意味、言動、心情をワークシートに整理して書かせる。
【興味や関心を高める】
- B 登場人物の「生き方」から「自分の生き方に取り入れたいこと」を考えながら読ませる。
【自分と結び付ける】
- C 伝記から読み取ったことと自分自身のことを関わらせながら考えたことを読み取り伝え合う。
【互いの考えを述べる、比較する】
- D 自分が選んだ本を読み、オリジナル伝記を書かせる。
【新たなものを創り上げる】

■ 授業場面より

■ 教材との出会い・課題設定

- ①つかむ ②見通す

■ 見通し・追究・解決

- ③情報を把握・検討・精査する ④考えをもつ・表現する

A 【興味や関心を高める】

それぞれが見付けた、その人物の生き方が分かる「出来事」「言動、心情」と、そこから考えた「生き方」を書き、「自分に取り入れたいこと」が明確になるよう、表形式のワークシートの縦の項目にまとめることにしました。

例えば、「初めは大人たちにアンパンマンが不評だった(出来事)が、それでも子供たちのために書き続けたこと(言動)から、自分が正しいと思ったことを買ける人(生き方)だと思った。」というように、表にまとめた順に「出来事」「言動、心情」「生き方」と上から読んでいくことで根拠を明らかにしながら自分の考えを伝えることができました。



B 【自分と結び付ける】

教材文を読むときも自分が選んだ伝記を読むときも「生き方」が分かる「出来事」にはピンクの付箋、「言動、心情」には青の付箋を貼るという工夫をしました。そうすることで、「自分に取り入れたい生き方」を初めから意識しながら読み取ることができました。



見通し・追究・解決

⑤交流する ⑥まとめる

C【互いの考えを述べる、比較する】

「ぼくも〇〇さんが見付けた『出来事』『言動、心情』を選びました。」や「わたしは、〇〇さんと同じ『出来事』のところに目を付けましたが、〇〇さんと違って、～という『生き方』だと考えました。」というように、自分の考えを班で伝え合い、班のワークシートにまとめ、比較しながら考えました。

その際、拡大した表を使って考えを伝え合い、友達の影響も自分のワークシートにメモさせました。同じ人物を取り扱っていても、それぞれ取り入れたいことは違うことが分かり、伝え合うことで、一人一人が考えを深めることができました。

まとめ・振り返り・新たな学び

⑦振り返る ⑧広げる

D【新たなものを創り上げる】

やなせたかしの伝記で学習したことを基に、自分たちで選んだ伝記の人物について、伝記シートにまとめて、友達に紹介する活動を設けました。自分たちで選んだ人物も同じ形式のワークシート、同じ学習の流れで行ったので、児童が意欲的に学習に取り組んでいる様子が見られました。



2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

①つかむ（学び方を知る）

第二次で学習した伝記の読み方、「生き方」「自分に取り入れたいこと」を見つけて書く活動を、そのまま第三次でも取り入れた。伝記の学習は今回が初めてだったが、学び方を知った上で、次の活動に見通しをもって取り組むことができた。

⑤交流する（拡大表の活用）

「出来事」「言動、心情」「生き方」と3色の付箋を使って、席を移動しながら自分たちの考えを話し合えるようにしたことで、似ている考えや違う考えを整理しながら話しやすくすることができた。

また、拡大した表に整理する活動では、見出しを付けて整理することで、短く、分かりやすくまとめる力も付けることができた。

⑦振り返る（文章構成図を使う）

説明文の授業で、段落と段落の関係を文章構成図に表す活動を取り入れ、学習が進むごとに文章構成図を書き足していった。振り返り時に本時で完成した文章構成図を想起させることで、文章の構成がよく分かるだけでなく、次時への意欲が高まり、「読む必要感」が芽生えていた。

⑧広げる（伝記シートの作成）

自分で選んだ人物の伝記シートを同じ学級の友達に紹介するだけでなく、隣の学級にも紹介し、「次は、この本を読みたい。」という読書への意欲も高めることができた。

成果と課題

●成果

・「⑤交流する」では、自分の考えを発表して終わるのではなく、疑問に思うことを問いつつ話し合い、多様な考えがあることのよさを感じることができたため、自分の考えを発展、深化させる力を高めることができた。



・「③情報を把握・検討・精査する」では、既習したことを生かして、「生き方」が分かるところを意識しながら読む力が付いた。

・説明文の学習では、オリジナル辞典をつくり、意欲的に意味調べをする児童が増えた。自分だけの辞典をつくることで、積極的に意味を調べ、言葉を分類し、自然に語彙力を身に付けることができた。

●課題

・第二次から第三次が分断されることなく、スムーズな学習の流れをつくる必要があると感じた。そのためにも教師が児童に学習のゴールを明確にさせること、何のために、どんな力を高めるためにこの学習をするのかといった必要感をもたせることが大切である。

・活動の手順を教師が丁寧に確認しすぎていたので、その時間を省いて、児童がじっくり教材と向き合う時間や追究し合う時間を確保する必要がある。

・話し合いの際、「何を話し合わせるのか」「どう深めさせるのか」といった内容の精査、視点のたせ方が大事である。

■ 単元及び題材について

本単元の教材「ぼくの世界、君の世界」は哲学的な内容であり、筆者の主観的経験が基となって論立てられている。また、事例の後に新たな問題を提起したり、反証や限定の言い方を用いて説得力を高めたりという論の進め方の工夫も見られる。そのため、事例と意見の関係に着目しながら筆者の論の進め方を追い、最後には、論の進め方や筆者の意見について考えたことを意見文に書き表す活動とした。

■ 本時のねらい

本論の働きについて考え、論の進め方を捉えることができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 既習の文章構成を活用し、比較することで、論説文の論の進め方を捉える目的意識を高める。
【見通しをもつ】
- B 教材文を1枚に集約した全文シートを使用することで、筆者の意見を捉える上で意味段落の関係を押さえやすくしたり、自分の考えや友達の考えなど複数の考えを関連付けて考えたりすることができるようにする。
【協働して課題解決する】
- C 関係図や文で書き表すことで、文章全体の構成や論の進め方を整理することができる。
【情報を関連付けて整理する】
- D 振り返りシートを使用することで、前時までの学習とのつながりを意識して学習を進めることができる。
【学びの価値を実感する】

■ 授業場面より

■ つかむ・見通す
①つかむ ②見通す

A【見通しをもつ】

「論説文の文章構成や論の進め方は、今まで学習した説明文の文章構成と同じだろうか。」という疑問から、既習の説明文の文章構成を振り返りました。「説明文ノート」を専用ノートとして前年度から継続して使用しており、前年度の説明文と今年度の説明文の文章構成を見返しました。また、それらの文章構成と本単元の論説文の文章構成を比較するようにテレビに映しました。児童は「説明文は、序論と結論が強く結び付いていて、その具体例などを本論で述べていた。」「論説文の論の進め方は、今までの説明文と違う気がする。」「論の進め方を考えてみよう。」と目的意識もち、発言していました。



既習と本教材の比較



ノートを見返す

■ 考えをもつ・表現する・深める
③情報を把握・検討・精査する ④交流する

B【協働して課題解決する】

自力解決の時間をとった後、4～5人の班で論の進め方について話し合いました。まずは、本論で述べられている2つの事例の働きについて考えました。「事例1つ目は序論にある疑問を詳しく説明しているから、序論との関係が強い。」などと、考えを伝え合いました。接続語や「反証」「限定」といった表現の工夫にも着目し、根拠を基に理由付けしながら発言していました。本文を一枚に集約した全文シートを使用していたため、文章全体を俯瞰してみることができ、書き込んだり、線で結んだりしながら話し合いを進めていました。班での話し合いを進めることで、徐々に自分の考えが明確になっていく様子が見られました。



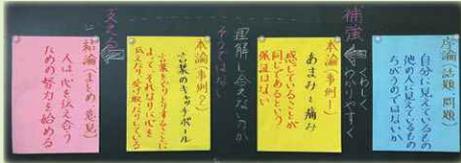
全文シートを使った交流



■ 考えをもつ・表現する・深める

⑥まとめる・表現する

C【情報を関連付けて整理する】



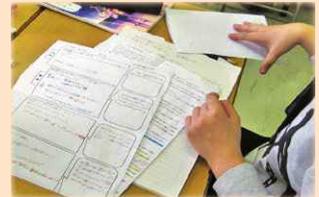
序論の要点を青付箋、本論の事例を黄付箋、結論の要点を赤付箋に書きました。そして、事例の働きについて出された班員や各班の意見を参考に、付箋を動かして関係図として書き表しました。「論の進め方はどうなっているのか」という学習課題を意識し、付箋の位置関係を工夫したり、関係性を表す線を描いたりして自分の考えを表現していました。例えば、序論と本論の事例1つ目を線で結び、「補強」の関係であると書いたり、事例2つ目は結論を「支える」働きがあると書いたりしていました。付箋を使用したことで、関係性を考慮しながら配置を変えることなどが容易となり、試行錯誤しながら論の進め方を整理している姿が見られました。

■ 振り返る・広げる

⑦振り返る

D【学びの価値を実感する】

毎時間の振り返りを書く欄を一枚に集約した振り返りシートを使用しています。一覧になっているため、前時までの学習の足跡を振り返ることができます。振り返る視点は、「何を学んだか（本時の学習内容の要点）」「どのように学んだか（既習の内容を生かす、友達と学び合う等）」「次時へのつながり」の3点です。振り返りを書く場面では、前時までの振り返りを見ながら、本時を振り返っています。児童は、「昨日学習した各事例の要点を基に今日の論の進め方を考えることができた。」「友達のことを聞いて、事例の働きについて考え直すことができた。」といった内容を書いています。また、単元最初に学習計画を立てているため、「次は要旨をまとめる活動なので、今日の論の進め方を生かしたい。」と次時へのつながりを意識して書いている児童もいました。



■ 2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

①つかむ（アンケート結果の活用）

3年生以上を対象に、読書（物語を読むこと）に関するアンケート調査を行い、その結果を単元の導入部分で提示した。「物語を読むことが好きではない」という意見が多かったことから、物語を読むことが好きになるには物語の魅力を伝えるとよいのではないかと、そのために物語の魅力を捉える力を高めることが必要だという目的意識をもたせることができた。

②見通す（単元で高める力の明示、学習計画）

単元最初の時間に、「この単元ではどんな国語の力を高めるのか」を児童と確認しながら「高める力」と「学習計画」をノートに書いている。毎時間触れながら、「振り返りシート」と関連させて学習を進めている。そして、単元末に「高める力」の自己評価をしている。単元全体を通して力を高めると意識と今の単元にどの単元で高めた力を活用できるのかという既習の内容を生かす意識を高めることができた。

⑧広げる（成果物の展示）

物語文の学習で作成した「物語の魅力紹介リーフレット」を学校図書館に展示し、全校児童に感想を書いてもらった。感想を見た児童は、「伝えたい魅力が伝わってよかった。」「本文を引用して、具体的に紹介すればもっと伝わったかもしれない。」と、作成したリーフレットを見直すことができた。

成果と課題

● 成果

- 「①つかむ」「②見通す」
アンケート結果を提示する、学校図書館にリーフレットを置く等、言語活動の目的意識をもたせる活動を単元の導入に行うことで、文章を読む視点の焦点化や書く際の構成の工夫等への意識をもたせることができた。
- 「②見通す」「③情報を把握・検討・精査する」
児童の「読むこと」に関する実態を踏まえ、「物語文ノート」「説明文ノート」の2種類の専用ノートを持たせている。前の学年の学習を振り返ることができ、既習の内容を生かした学習をすることができた。
- 「③情報を把握・検討・精査する」「⑤交流する」
「読むこと」の学習では、教材文を1～2枚に集約した全文シートを使用している。文章全体を俯瞰して考えることができるため、文章構成や伏線のとおり等を書き込みながら理解することができている。また、見せ合って比較しながら話し合うことができ、読みを深めるのに効果的であった。

● 課題

- 「⑧広げる」
深い学びの大切なポイントとなる「習得・活用・探究を踏まえた各教科等固有の学習過程」の中の「探究」に関する活動の設定が課題である。今後は他教科でも活用するなど、探究心を育成する単元構成及び言語活動の設定を考えていくこととしたい。

■ 単元及び題材について

本単元は、災害から人々の安全を守るための関係機関として、地域の消防署や消防団の働きを取り上げる。児童自身の知識や資料から読み取ったことを基に、課題を設定し、体験活動や聞き取り調査、資料等を活用して、消防署と関係機関との連携体制、そこに従事している人々と地域の人々との協力について理解し、考える単元構成となっている。中心素材として「平成13年深持小火災」を用い、新聞記事等の資料から読み取ったことや疑問を基に「火事が起きたときや火事をふせぐために、だれが、どのようなはたらきをしているのだろう。」という課題を設定する。問題解決のために、十和田消防署と連携したりリモート見学と消防署作成のDVD視聴、実際に校内や地域をめぐるながら防火設備を地図にまとめる活動、地域の消防団と連携した消防団屯所の見学を学習活動に位置付ける。そして、消防士と消防団の働きについて理解を深めたり、どのような思いで活動しているのかをつかませたりしながら学習を進め、単元末の学習では、火事から生活を守るために必要なことを考え、まとめていくこととしている。

■ 本時のねらい

消防士と消防団の働きの違いについて話し合う活動を通して、消防士、消防団はそれぞれの地域の安全を守るといふ思いで役割を果たしていることを理解するとともに、自分たちも火災に備えて生活することの大切さに気付くことができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 火災時の消防士と消防団の消火活動の時系列表を少しずつ提示することで、それぞれの活動の違いに目を向けさせるとともに、なぜ活動が違うのかという疑問をもつ。 **【興味や関心を高める】**
- B 消防士や消防団が行っていた仕事や活動について既習事項を振り返らせることで、その活動の違いについて話し合う。 **【共に考えを練り上げる】**
- C 消防士と消防団は、地域を守るという共通の思いをもたせることで、協力してそれぞれの役割を果たすことに、話し合いを通して気付く。 **【思考して問い続ける】**
- D 消防士、消防団、地域のそれぞれができる役割を果たして消火活動に取り組むとともに、自分も防火の意識をもつことが必要であることをまとめさせることで、消防団員の話をもとに整理する。 **【共に考えを創り上げる】**

■ 授業場面より

■ 課題把握

- ① 動機付け
- ② 方向付け

■ 課題追究

- ③ 情報収集

A 【興味や関心を高める】

前時までに、十和田消防署消防士（高瀬さん）、消防団（中野渡さん）のそれぞれの仕事や工夫について学習しています。

最初に、深持小学校火災時の2人の1日を時系列表にして、少しずつ開いて見せていきました。後半、消防士と消防団の活動が違うことに気づき、「なぜ高瀬さんたちは帰ってしまうのか。」「なぜ中野渡さんたちは遅くまで見守りをしているのか。」と、それぞれの活動の違いに焦点化していくことができました。

そこからそれぞれの活動の違いについて考え、意味付けていくことが、本時のめあてになりました。



B 【共に考えを練り上げる】

なぜ、高瀬さんたち消防士は署に戻り、中野渡さんたち消防団はずっと現場にいたのかを、既習事項をもとに考えていきました。

消防士は、1件の火災だけに関わっているわけではないのでずっと現場にいられないこと、消防団の見守りは、また火災が起こらないように必要な活動であることなど、既習事項を基に考え、意見を交わしていきました。

時系列表と児童の発言や既習資料をつなげながら、「消防士も消防団も、役割を果たしているのではないか。」という思考を導き出すようにしました。



■ 課題追究

④ 考察・構想

C【思考して問い続ける】

消防士と消防団の役割を確認したところで、消防士は消火を終えたら署に戻ったり、仮眠をとったりしている点を指摘し、「果たしてこれは、協力していると言えるのだろうか。」と、思考を揺さぶる発問をしました。

その根拠となる情報として、高淵さん、中野渡さんにインタビューした音声聞かせました。そこから、消防士も消防団も地域を守るという共通の思いをもって活動していること、それぞれが役割を果たして消火活動が行われていることなどを整理し、協力して互いの役割を果たすことを捉えさせました。



■ 課題解決・新たな課題

⑤ まとめ ⑥ 振り返り

D【共に考えを創り上げる】

高淵さん、中野渡さんたち以外に協力した人はいないかを探るため、インタビューの続きを聞かせたところ「地域の人」の協力が気付いたので、深持小火災当時の地域の人々の活躍について紹介しました。

さらにインタビューを聞かせ「他に協力した人はいないか。」と投げかけると、「自分」も地域の安全を守る一員として協力していることに気付くことができました。実際に消火活動に関わっている人だけでなく、自分たちも火災を起こさない気持ちをもつことが地域を守ることにつながるという思いを、振り返りにまとめることができました。



■ 2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

② 方向付け

• 中心資料を用い、疑問に思うことを多面的に考えさせ、分類する。そして、児童の疑問を基に課題を設定し、学習計画を立てる。

- 1) 資料を見る視点
人、もの、出来事、様子
- 2) 疑問を見いだす視点
5W1H

④ 考察・構想

• 様々な立場の人の思いを想像させ、ロールプレイを行うことで多角的に考察させる。

- 例 スーパーの店員と客
農家と消費者
戦地に向かう人と国民 など

• 思考をゆさぶる資料提示、発問をする。

⑥ 振り返り

- 学習内容を基に、当時の人になったつもりで思いを吹き出しで表現させる。
- 振り返りの視点を与える。

成果と課題

● 成果

- 児童にとって身近な出来事を取り上げることで、人や事象に目を向けて「知りたい」という思いをもたせること（動機付け）ができた。
- 多角的な視点をもたせることで、様々な発見をするとともに、「自分に関係があることだ」という思いをもって考察することができた。
- それぞれの立場や人の思いをロールプレイや吹き出しで表現させることは、実感を伴った学びや多角的な考察につながった。

● 課題

- 主に課題追究の過程で、以下の課題が残った。
 - ① たくさんの資料を児童に与え、情報過多になった。思考を深める中心資料と、思考を揺さぶる補助資料を、児童の思考の流れを意識し明確に使い分けながら提示することで、児童の深い学びにつながると感じた。
 - ② 考えを書く時間の十分な確保が、思考を深めさせる必要要素であると実感した。
- 児童自身が問いを生み出したり、納得できる答えを作り上げたりできるように、児童の発言をつなぐ問いかけや児童同士で発言をつなぐ手立てが必要だと感じた。

I (4) 小学校算数科 第5学年 単元名「単位量あたりの大きさ」 2/4

■ 単元及び題材について

本単元では、混み具合のように、異なる二つの数量の関係として表される単位量あたりの大きさについて理解し、その考えを用いて日常生活の中の問題を解決していく。二つの量を比べるためには、公倍数に揃える方法と、一方を1として単位量あたりを求める方法とがある。児童にとっては、整数で処理できるよさから公倍数に揃える方が分かりやすいと感じるかもしれない。

しかし、比較対象が多数の場合や比較対象を追加する場合には、単位量あたりの大きさを比べる方が効果的であることに気付かせたい。最初は公倍数に揃えて比較することを考えさせつつ、徐々に単位量あたりの大きさを求めて比較していけるようにしたい。

■ 本時のねらい

- ・異種の二つの量のうちどちらを単位にすると分かりやすいかを考えている。
- ・異種の二つの量のうちどちらの単位の一つ分で比べたら分かりやすいかを理解し、単位量あたりの大きさを求めることができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 教材との出合わせ方を工夫し、お楽しみ会の写真を全員分プリントするために、より安い店を選びたいという場面設定をして、興味・関心や意欲をもって取り組めるようにする。【興味や関心を高める】
- B 前時の学習を基にし、比較しやすいように単位とする量を固定して考えていく際、枚数を何枚に固定して(揃えて)考えるかを学級全体での対話を通して自己決定させ、自力解決につなげていく。【見通しをもつ】
- C 自力解決後に自由に移動して相手を見付け、互いに自分の考えを述べて比較し合い、よりよい方法について対話しながら学び合う場面を設定する。(協働での思考①)
さらに、全体での発表場面において、複数出された方法について再度比較し合い、対話を通して効率性や汎用性の視点から、よりよい方法を見いだす学び合いの場面を設定する。(協働での思考②)
【互いの考えを述べ、比較する】
- D 複数出された方法を比較検討する中で、さらに揺さぶりをかける質問を提示することで、より汎用性の高い方法に迫ることができる。
【自分の思いや考えと結び付ける】

■ 授業場面より

■ 教材との出会い・課題設定

- ① 数理的な捉えと気づき ② 課題の設定

■ 見通し・追究・解決

- ③ 課題の理解 ④ 見通しをもつ

A 【興味や関心を高める】

少し前に行ったお楽しみ会の写真を提示しました。「あ、お楽しみ会の時の写真だ。」という声が出る中、「この写真をみんなにもあげたいのだけれど、迷っています。」と言ってA店、B店の値段と枚数を提示しました。

「どちらのお店が安いのかな。」と発問しました。すると、児童はすぐにAだ、Bだと食いつき気味に話し始めました。この段階で、値段も枚数も違う数字なのですぐには比べられないことに気付いたようです。

値段の安さを比べるという日常生活でもよくある場面なので、興味をもって題意を捉えることができたようです。



問題把握を容易にするカードの提示

B 【見通しをもつ】

再度、値段も枚数も違うので比べられないことを確認し、どちらに揃えたらいいか問かけると、1枚の値段で比べるという考えと、枚数を揃えるという考えが出されました。値段を揃えるという考えは、数字の大きさから考えて出されなかったものと思われます。そのため、枚数を揃える方法(1枚に揃える、25枚・40枚の最小公倍数で揃える)を進めていくことを確認しました。また、それぞれわり算、かけ算で求められることも確認したことで、ほとんどの児童が自力解決の見通しをもたえたようでした。「一人で解決できそうだ」という段階までしっかりと見通しをもたせることが、次の展開場面での主体的・対話的な学びへとつながるものと考えます。



意見を出し合いながら見通しを立てる

見通し・追究・解決

⑤解決の実行 ⑥解決したことの検討

C【互いの考えを述べ、比較する】

協働での思考①

自力解決が終わった児童から立って自由に移動し、同じく終わった相手を見つけて互いに自分の考えを伝えます。相手を次々に替えながら、よりよい方法について学び合っていきます。この時に自力解決ができない児童は、挙手をしてヘルプを呼ぶ（友達を呼ぶ）ことができます。学び合いが終わった児童がヘルプに行き、ヒントを出して助けることで互いに学び合うことができます。本時では1人の児童がヘルプを呼び、その後自力解決ができました。



協働での思考②

学び合いの終わった児童が、自主的に黒板に自分の考え方を書きます。本時は、1枚当たりの値段を求める式が1つだけ出されました。最小公倍数で比べる式が出されなかったため、教師が準備しておいた別の考え方を提示し、200枚に揃えて比べたらもっと式も多く、代金も大きくなって計算が面倒になることを児童に気付かせました。



まとめ・振り返り・新たな学び

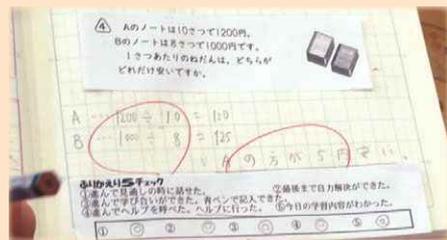
⑦解決過程や結果の振り返り ⑧新たな疑問や問いの気付き

D【自分の思いや考えと結び付ける】

さらにもう一つC店もあったことを伝え、店が三つになった場合はどうするかを問い、ゆさぶりをかけました。C店が加わったことにより、公倍数で枚数を揃えることが困難だという声を引き出し、1単位量当たりで比べるよさを再確認しました。

また、C店の1枚当たりの値段が割り切れない値だったため、児童から「どうしよう?」という声も出しましたが、話し合いを通して割り切れなくてもどちらが安いかは比べられることが確認できました。

振り返りでは、授業内容の他に、『振り返り5チェック』という自己評価(◎○△)も書かせました。進んで友達との学び合いができたか、進んでヘルプを呼ぶ(ヘルプに行く)ことができたか、今日の内容が納得できたかなどを自己評価するもので、授業で見取れなかった部分の評価の参考にしています。児童からの振り返りでは、「○○君の言葉の式が分かりやすくよかった。」「前に公倍数でやって苦労したから、今日は1枚当たりの値段で比べたから簡単だった。」といった気付きも見られました。



2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

②課題の設定

児童の振り返りに書かれていた疑問を、次時の問題にしたところ、意欲的に課題解決に取り組んでいた。

⑥解決の実行

自力解決ができない児童は、挙手してヘルプを呼び、友達からヒントをもらえるようにした。すると、ヒントをもらった児童も自力で解決でき、一方のヒントを出す児童も相手分かりやすいように工夫して説明しようとするので、互いに学びの効果があつたと考える。

⑦解決過程や結果の振り返り

ラミネートした『算数交流カード・振り返りカード』を全員に持たせ、それを参考に振り返りを書かせることで、最初に自分が考えた方法から、友達の説明を聞いてよりよい方法に気付くようになった。また、自己の思考の変容を自覚するような振り返りができるようになった。

成果と課題

●成果

多様な考え方に触れさせるために、教室の中を移動しながら自由に相手を見つけて複数の友達と交流する場を設けたことにより、個々の時間差に対応できた。また、他者への説明を通して情報としての知識や技能が構造化され、数学的な表現を用いてより簡潔・明瞭・的確に表そうとする思考力や表現力が付いてきた。

●課題

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導のポイントは、どれも実践に取り入れたいことばかりである。しかし、それらを1単位時間内にどのように組み合わせ位置付け、どこに時間をかけたりどこを簡単に扱ったりするかを考え、日々の授業の中で効果的に実践していくことが必要である。

また、まとめ・振り返りの段階を充実させるためにも、授業の指導過程における時間配分も今後の課題である。

■ 単元及び題材について

本単元は、自然界の水の様子について、気温や水の行方に着目して調べる活動を通して、水は水面や地面等から蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくとともに、空気中の水蒸気は結露して再び水になって現れることについて理解することや、水の様子について追究する中で、既習の内容や生活経験を基に、水の状態変化と気温や水の行方との関係について、根拠のある予想や仮説を発想し、表現できることをねらいとしている。

本題材「空気中の水蒸気」は、本単元の第二次の学習内容である。

第一次において、水は目に見えない水蒸気となって空気中に出ていくことと水蒸気は水が姿を変えたものであることを理解しており、前時では、蒸発した水蒸気が自然に水滴になる現象を観察している。

その上で本時は、空気中の水蒸気存在について自分の考えを明確にし、それを確かめるための仮説と実験方法を考え、本当に実験ができるかどうか友達と話し合い、友達の意見と比較しながら自分の考えを深めていくことをねらいとしている。

次時では、自分の考えた実験方法で検証し、考察する。実験が上手くできなかつたり、予想した結果が得られなかつたりするなどの試行錯誤の場面を大切にしながら、協働的に学ばせていく。

■ 本時のねらい

空気中に水蒸気があるかどうかを確かめる方法を見いだすことができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 前時の学習を振り返りながら、空気中に水蒸気があるかどうか予想し、話し合わせることで、課題を発見することができる。 **【振り返って次へつなげる】**
- B 互いに考えを出し合って、空気中に水蒸気があるかどうか分かる実験方法を導き出すことができる。 **【互いの考えを述べ合い、比較し、協働して課題解決を図る】**
- C 他の人の考えを聞きながら、自分の考えた実験方法との違いや共通性に目を向けさせ、実証性のある実験方法かどうかを判断することができる。 **【思考して問い続ける】**
- D 自分や友達のがんばったことを認め合うとともに、自分の考えの変容について気付かせ、自らの学びを価値付けることができる。 **【自分と結び付けて考える】**

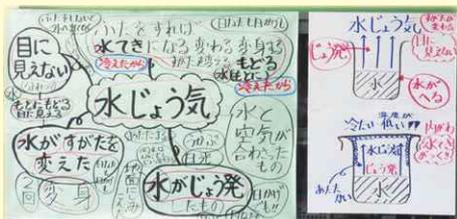
■ 授業場面より

■ 課題の把握（発見）

- ①自然事象に対する気付き ②課題の設定

A【振り返って次へつなげる】

前時に児童が書いた理科日記を読み上げ、学習したことを確認しました。前時まで学習した内容を記したイメージマップを基に、復習したり、前時まで使っていた水の入ったビーカーを提示したりして、「蒸発して見えなくなった水蒸気は、この空気中にあるのでしょうか。」と発問しました。「ある」と答えた児童が多かったのですが、「ない」「分からない」と答えた児童もいたことから、本時の学習課題を「空気中に水蒸気があるかどうか確かめるためにはどうしたらよいか。」と設定し、学習の必要性を感じるように工夫しました。



■ 課題の探求（追究）

- ③予想や仮説の設定 ④検証計画の立案

B【互いの考えを述べ合い、比較し、協働して課題解決を図る】

「もし空気中に水蒸気が〇〇ならば、空気を〇〇すると〇〇なるはずだ。」という話型を提示し、自分で仮説を立てて結果を予想させました。あらかじめ準備しておいた使いそうな実験道具を見せながら、実験方法を書かせ、結果も予想させました。同じような考えをもっている児童のノートに同じ色の紙を付けておき、同じ色同士でグループになるようにしました。お互いに意見を発表して比較し、自分の考えた方法で本当に確かめられるのかどうかを話し合いました。

見てみて！ビーカーをふせておくと…



■ 課題の探求（追究）

③予想や仮説の設定 ④検証計画の立案

C【思考して問い続ける】

自分で考えた実験方法を全員の前で発表したり、他のグループの友達の実験方法を聞いたりして、自分の考えとの違いや似ているところを見つけました。「袋に空気を入れて、窓際に置く。」「天井にラップをはって、理科室を大きなビーカーとして見立てる。」「氷水をビーカーに入れる。」など、様々な考えが出てきました。

友達の発表を聞いて、実証性のある実験方法かを判断し、新たな自分の考えを付け足す場合は、赤ペンでノートに書くようにしました。

自分が考えた実験方法を見直した上で、使いたい実験道具を青ペンで囲ませました。あとで教師が必要な実験器具を把握し、準備するためです。自分が考えた実験方法を変えた児童も、考えを変えなかった児童も互いに認めることで、自信をもって次時の活動に臨めるようにします。



■ 課題の解決

⑨学習の振り返り

D【自分と結び付けて考える】

学習の振り返りとして、理科日記を書きました。日常的に理科日記を書く際の6つの視点を提示しています。「①学んだことや身に付いたこと②前の時間までに学習したことで役立ったこと③解決するためにがんばったこと④友達のすごいと思った発言や行動⑤自分の考えが変わったこと⑥次の学習への思い」のうち、本時では、④と⑤の視点について重点的に書くように提示しました。「〇〇さんの氷水を使う実験方法は自分の考えた方法よりも良いと思った。やってみたい。」さらに余裕がある児童は、進んで他の視点についても書きます。多様な考えを認め合い、自分の考えを見直して、次時の実験の見通しを共有します。

児童は、自分の考えた実験方法で確かめられることが分けると自信満々の様子でした。

意見を聞いて、なるほど！と思うところがありました。



■ 2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

⑤ 観察・実験の実施

次時に、空気を入れた袋を窓際に置いたり、天井にラップをはったり、水槽をひっくり返して床に置いたりして、前時に自分が考えた実験方法で検証した。水が出てこない結果となった児童は、周りの友達の実験の様子を観察し始め、自然と話し合いが始まった。そして、再び違う実験方法に取りかかった。ある児童が、ビーカーに氷水を入れたらすぐにビーカーの外側に水滴が付いたと発言し、水滴が付いた理由を全体で話し合った。蒸発した水蒸気が自然と水に戻った現象を根拠にして、温度差に着目すればよいと発表した児童がいた。みんながなるほどと納得した上で、再検証することとなった。実験方法を考え直しながら検証する中で、空気中に水蒸気があることに気づき、考えを確かめることができた。



成果と課題

● 成果

- 多くの児童が、自分の成長を確かめる力や自分の生活を振り返り、学習と結び付ける力、友達の考えを尊重し認め合う態度が身に付いた。
- 自分が考えた実験が上手くいかなくても、よりよい方法を粘り強く考え、試行錯誤を重ね、指示がなくても自分で考えて学習する姿が見られた。
- 話型を活用して仮説を考えたことで、実験方法のイメージを膨らませることができた。既習事項を振り返りながら考える力が付いてきた。
- 自分の考えをかたくなに変えなかった児童が、友達の違う考え方を認め、考えを変化させることができるようになった。

● 課題

- 児童の先行経験、レディネスをより丁寧に把握し、焦点化すべき点を明確にした上で授業に臨むことが大切である。
- 課題解決のために発見した事実を加えながら思考を繰り返す学習方法を、他の教科や活動にも活用し、学び合い、認め合える学びとしていきたい。

I (6) 小学校外国語科 第5学年 単元名「ふるさとメニュートレイを使って買い物しよう」6/8

■ 単元及び題材について

本単元は、What would you like?というUnit名にあるように、丁寧な表現を用いた買い物場面を主な題材としている。英語にもWhat would you like? やI'd like ~. といった日本語の敬語に相当する丁寧な表現が存在することを、まずは音声で十分に慣れ親しんだ後に、実際の買い物体験を通して学んでいく。

■ 本時のねらい

食べてみたい日本各地の名物を、店員とお客になって注文したり値段を計算して会計したりする活動を通して、丁寧な表現を使って買い物することができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 本時のActivityに関する表現を、映像を見ながら楽しく歌ったり、テンポよくチャンツしたりすることでコミュニケーションの場面や状況を理解させる。 **【興味や関心を高める】**
- B 担任とALTが、Small Talkで客と店員を演じ、既習表現を織り交ぜた買い物場面を見せることで、どんなことを話しているか類推させる。 **【既習を活用して考える】**
- C 買い物場面では、お客であれば1,000円以内でメニューを自分で選択することや、店員であれば合計金額を計算して伝えることなど、自己決定の場や既習を想起して活用する場を設定する。 **【知識・技能を活用する】**
- D 本時の活動をめあてに沿って振り返らせると共に、改善すべき点やさらに挑戦したいことに目を向けさせ、次につなげる。 **【振り返って次へつなげる】**

■ 授業場面より

■ コミュニケーションの目的や場面、状況の理解

① あいさつ・チャンツ・歌・ジングル

■ コミュニケーションの見通しを立てる

② Small Talk

A【興味や関心を高める】

歌“What would you like?”の中には、レストランでの注文のやり取り、メニューに出てくる食べ物や飲み物の言い方、3桁の金額の言い方など、本時のActivityを行う上で必要となる基本表現が心地よいメロディと共に出てきます。映像を見ながら歌うことで、それらの表現が用いられる場面や状況を理解することにもつながります。

チャンツはActivityへ向けてより実践的な内容（店員とお客のやりとり）となっているので、ただ声に出すだけでなく、窓側と廊下側に分けて交互に言わせたり、ペアで向き合って相手意識を持って言わせたりするなど、形態を変えながら楽しく取り組ませました。



B【既習を活用して考える】

本時に至るまでに音声で慣れ親しんできた大事な語句や表現をSmall Talkに意図的に織り交ぜました。児童は、買い物場面をデジタル教材やアニメーションでは見てきましたが、“人対人”のリアリティあふれる買い物場面に触れるのはこれが初めてとなります。店員役を務めるALTの衣装や、レジ・紙幣等の小道具にもこだわりました。ALTの話す生の英語を、既習を活用して推測できたならば、それは子どもにとって大きな喜びであり、自信にもつながります。

担任とALTによるSmall Talkはどんな内容か問うと、児童は既習を生かしながら類推できたことを話していました。



■ 具体的なコミュニケーション活動を行う

③Activity1 ④中間評価とActivity2

C【知識・技能を活用する】

実際に児童にやり取りさせる場面では、4月から一貫して、あえて“十分なお膳立て”をしないことや、間違えてもよいのでまずは活動させてみることに留意してきました。本時でも1回目のActivityではうまくいかない子が多くいました。どんなことで困ったか問うと、「いきなりご注文は？と問うのは不自然な感じがした。いらっしゃいませと言いたかったが分からなかった。」「何百何十円の英語での言い方が分からなかった。」「はいどうぞ、と商品を渡すときの言い方が出てこなかった。」等々、様々な意見が児童から出されました。その後、解決方法をみんなで話し合ったり、ALTと一緒に、ピクチャーカードで言い方を復習したりしました。既習を生かして、“How do you say *Irasshaimase* in English?”と英語でALTに質問する子もいました。中間評価を経て2回目のActivityを行うと、1回目よりは自信をもってやり取りしていました。



■ まとめと振り返りを行う

⑤振り返り

D【振り返って次へつなげる】

Unit内でメインとなるActivityの後には、振り返りシート内のチェック項目の他に、学習感想を書かせています。児童の感想の中に、「自分の英語が通じるか、ロバート先生と話してみたい。」という感想がありました。本時では児童が店員役とお客役に分かれて買い物体験をするActivityでしたが、次時ではぜひ「Welcome to Robert Shop」の場面を設定し、ALTの先生が店員を務めるお店へ買い物に行く体験をさせたいと思いました。自分が話す英語が本当にALTにも通じたという経験を積み重ねることは、児童にとって大きな自信につながり、児童が今後、海外の方と会ったときに「実際に英語でお話してみよう」という意欲にもつながるので、このような感想や意見は大事にしていきたいと思いました。

なお、保護者が小学校の英語の授業はどのように行われているのか関心を示していたため、児童が書いた感想や授業の様子は学級通信等で伝えるようにしました。



■ 2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

① 歌 (“Let's Sing” の扱い方)

歌はどのUnitも非常にレベルが高いため、いきなり「歌いましょう」では到底無理がある。聞くだけで2回→聞き取れた単語を発表しようで2回（板書）→答え合わせしようで1回字幕再生するなど、十分聞かせてからはじめて「歌いましょう」が効果的だった。

② Small Talk

指導者自身が意図的・積極的に英語を使い、時には“ジャパニーズイングリッシュ OK”の精神を背中中で示したり、学習者のモデルになったりすることは児童のモチベーションを高める上でも非常に重要だと感じた。

成果と課題

● 成果

学びのスタンダードに基づいて、児童の状況を踏まえて授業を進めることが大事だと思った。Activityでは、どのUnitでも必ず、活動→中間評価（賞賛・つまずきや不安への支援）→再活動の流れで、子どもに自信をもたせていくことで学びが深まっていた。

● 課題

「目的・場面・状況」を設定した「意味のある言語活動」が重要である。その中で英語を使いながら言葉を獲得していくのが本来のあるべき姿と考える。知識として学んだ言葉と、実際の使用場面をつなぐための工夫がもっと必要であった。

■ 単元及び題材について

本単元は古文「平家物語」の冒頭文、扇の的、弓流しの場面、「徒然草」の仁和寺の法師の話、そして、五言絶句の「春暁」「絶句」、七言絶句の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の三篇が収められた「漢詩の風景」からなる。その中から、本時では単元の最後に位置する「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」を取り上げた。音読により表現の美しさやリズムを捉え、巧みな情景描写に気付かせながら、作者の心情を味わわせることで、漢文に親しみをもたせることのできる題材だと考える。

■ 本時のねらい

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」に描かれている情景を、漢和辞典を活用して現代の言葉に直して表現することで、作者の心情を理解することができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 導入で「黄鶴楼…」の中国語読みの音声を聞かせることで、日本語の言語的ルーツは中国によることが多い点を再確認する。 **【興味や関心を高める】**
- B 古代の日本人が中国の優れた文化や思想を取り入れるために工夫したことを、白文を訓読文にするという形で追体験させる。 **【先哲の考え方を手がかりとする】**
- C 漢和辞典で調べた語句の意味を基にして、少人数グループによる交流活動を通して解釈し、情景を現代語に直す。 **【協働して課題を解決する】 【共に考えを創り上げる】**
- D 自分たちの現代語訳を基に、「黄鶴楼…」の結末における李白の心情について各自で考え、根拠を示して判断する。 **【知識・技能を活用する】**

■ 授業場面より

■ 捉える ① 捉える

A【興味や関心を高める】

「黄鶴楼…」の漢詩を白文で示し、厳かに流れる中国語読みの音声を聞かしました。

これまで学習してきた五言絶句から七言に変わったことで押韻する箇所も増えるのですが、中国語読みの方が押韻は実感できるようです。

また、「花」は「ホウ」と読むことに気付いた生徒がいたのは、既習の「絶句」でも「花」が出てきていたからです。

このように、既習の内容を生かしながら、漢詩という独特なジャンルの総まとめである「黄鶴楼…」に挑む雰囲気づくりができるよう工夫しました。



白文を提示して中国語読みの音声を流す

■ 見通す ② 見通す

B【先哲の考え方を手がかりとする】

黒板にはまだ白文の状態でも漢詩が提示されています。「どうやって読んでいくのだろうか。」と生徒は悩みます。そこで書き下し文を読み上げます。訓読は、千年以上前、漢詩の内容を日本に取り入れたいと当時の日本人が施した工夫です。生徒は訓読された文言である書き下し文を聞き、白文に訓点を施していきます。

白文を見て集中して聞くことで語順の変化に気付くことが、訓読文に不可欠である返り点の習熟につながると考えました。また、白文の訓読化を通して、漢詩を日本語として学んでいくという見通しをもてるよう促しました。



聞き取った訓読を基に白文に訓点を施していく

■ 考えを形成する・表現する・深める

④考えをもつ・表現する ⑤交流する

C【協働して課題を解決する】
【共に考えを創り上げる】

七言絶句は1行に7字の漢字が書かれているので、生徒は、漢和辞典で意味を確かめ、複数の意味の記述があれば文脈に合わせて適切なものを検討し、描かれた情景について現代語で表現していきましました。

「故人」は現代の日本語では「亡くなった人」を指しますが、漢和辞典を引くことで「故」には「昔なじみの」という意味があることがわかり、作者である李白と孟浩然との関係性が浮かび上がります。

「碧空尽」や「天際」の理解を促すために長江の景色をモニターで提示し、視覚的な支援を行いました。



漢詩に描かれた情景をグループで検討する

■ 考えを形成する・表現する・深める

⑥まとめる・表現する

D【知識・技能を活用する】

この漢詩には作者である李白の心情が直接書かれてはいません。そこで漢詩に描かれた情景を全体で共有し、その上で各自が李白の心情を考えました。「長江のはるかかあなたに孟浩然は去ってしまい、李白はもう会えないのだなと別れを悲しんでいる。」「孟浩然の船が見えなくなってもただ流れを見つめ続けている李白は、友との別れに放心状態である。」「この漢詩には情景しか描かれていないことから、李白は言葉では言い表せない別離の悲しみの中にいる。」等の発表から、漢詩に描かれた情景を判断の根拠とし、時代も国も違う詩仙李白の心情に迫ることができました。



情景を根拠として考えた作者の心情を発表する

■ 2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

⑤ 交流する（連句の制作）

「新しい短歌のために」という教材の発展学習として、小グループごとに連句の制作に取り組んだ。連句は1年次の「空を見上げて」という既出の教材である。

最初の五七五を教師側でいくつかのパターンとして準備し、それに生徒たちが七七→五七五→…と付け加えていく。

感染予防対策で距離を近づけた隊形を作らなくてもできるグループ活動として試したものであったが、生徒たちは意欲的に取り組み、表現の吟味、技法の活用等を積極的に試みて、鑑賞も充実したものとなった。

⑧ 広げる（インターネットを活用した調べ学習）

興味のある職業について情報を集め、自分なりの職業ガイドを作って紹介し合った。コロナ禍で体験活動がほぼできない時期だったので、調べ学習を通して情報の集め方を身に付けることは重要であった。

その後の「メディアと上手に付き合うために」という情報教材の学習でも、著作権や引用の仕方について学び、職業ガイドの学習内容と関連付けさせることで、汎用性の高い内容の学習となったように感じる。

成果と課題

● 成 果

「①捉える」「②見通す」過程において、単元の導入時と各時間の授業でも生徒たちが常に見通しがもてるよう流れを踏まえたワークシートの作成や、生徒自身が目的や必要性を意識して取り組めるような学習課題の設定を心がけたところ、生徒たちの主体的に学ぼうとする意識が高まったように思う。

また、「④考えをもつ・表現する」「⑤交流する」「⑥まとめる・表現する」過程においては、学習形態を工夫し意見や表現を交流させながらも、終末は一人で課題に立ち返ってじっくりと考えられるような展開となるよう留意した。

● 課 題

深い学びを実現するためには、「③情報を把握・検討・精査する」「⑤交流する」「⑦振り返る」等の過程の中で、適切なタイミングで「本当にそうだろうか。」「なぜそう思ったのか。」といった問いかけや揺さぶりを行うことが必要な場面があると感じた。これには十分な生徒理解と教材研究、そして経験が必要である。それらの点も含め、今後も研鑽していきたいと思う。

■ 単元及び題材について

本単元は、北海道地方の自然環境を取り扱う際の発展学習として、アイヌの人たちを取り上げる。北海道の自然環境と共生したアイヌの人たちの伝統的な暮らしや文化が、明治時代以降の北海道開発という歴史的背景によって、どのような影響があったのかを考えさせることで、先住民族の権利や多文化社会を学ぶ素地を身に付けることができる教材であるとする。

■ 本時のねらい

アイヌの人たちの文化について、ICTを活用した調査活動を通して、多面的・多角的に考察し、アイヌ文化が自然環境と共生して築かれてきたことや、長い歴史の中で受け継がれてきたことを理解し、関連付けて説明できる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 導入時に資料を掲示することで、アイヌの人たちに対する興味・関心をもたせ、課題意識を高める。
【興味や関心を高める】
- B 小集団によるグループで、資料の読み取りやタブレットを活用した調べ活動や話し合いをさせる。
【協働して課題を解決する】
- C タブレットやテレビを活用して、他のグループと情報及び意見交換を行う場を設定する。
【様々な手段で説明する】
- D 学習した内容や資料を基に、考察したことを自分の言葉で書いてまとめ、振り返らせる。
【自分の考えを形成する】

■ 授業場面より

■ 教材との出会い・課題設定

①動機付け ②方向付け

■ 見通し・追究・解決

③情報収集

A 【興味や関心を高める】

「撫牛子や浅虫がまさかアイヌ語から来ているなんて知らなかった。」など、自分たちの身近にある地名などのアイヌ語に驚いていました。

その後、ウポポイ（民族共生象徴空間）の商業施設を見て、生徒は興味をもちながら、気付いたことを意欲的に発表しました。生徒たちが見付けた熊や鮭、オオカミ、踊り、アイヌ文様、アイヌ語などのキーワードを基にアイヌ民族の暮らしや文化について追究することを課題として設定しました。

導入の場面で、アイヌに関する映像などを提示することで、生徒が興味や関心をもって課題に積極的に取り組めるようにしました。



映像を見て気付いた発言やつぶやきを生かす

B 【協働して課題を解決する】

アイヌの人たちの暮らしの様子について、偶数班が「生活」を、奇数班が「歴史」をテーマとして、班ごとに配付資料やタブレットを活用した調査活動を行いました。

始めに、個人で Web 検索した資料をスクリーンショットで保存・メモする、タブレットの資料箱から配付資料を選択して使用するなど、様々な方法で情報収集をしていきました。

次に、学習支援アプリを活用し、個人で調査した資料を班で1つに整理した後、情報共有及び意見交換を行い、課題について話し合っていました。

班内での情報交換



学習支援アプリを活用して資料の収集、分析、整理を班で協力して考え、まとめていく

見通し・追究・解決

④ 考察・構想

C【様々な手段で説明する】

偶数班と奇数班が交互に発表し合う、情報共有や意見交流を行いました。「私たちの班では、アイヌの人たちの歴史をテーマに調べました。アイヌの人たちは、この世のあらゆるものに魂が宿っているという考えをもっています。動物や植物のような恵みを与えてくれるものや道具などをカムイ（神）として崇めています。」「私たちの班では、アイヌの人たちの生活について調べました。男性と女性で仕事を分担し、狩りや漁を行い、鮭や鹿、あざらしの肉を食べていました。衣服は、動物や魚の皮、鳥の羽などから作っていました。」など、タブレットとホワイトボードを活用しながら他の班に説明していました。



他の班と情報を共有し、考えを広める

まとめ・振り返り・新たな学び

⑤ まとめ ⑥ 振り返り

D【自分の考えを形成する】

展開の最後の部分で自分の考えを深めるために、まず、津軽塗やお山参詣、マタギなど津軽の文化を紹介しました。「津軽弁がなくなったら寂しい。」「お山参詣を知らなかった。」「マタギの考え方や暮らしの様子は、アイヌの人たちと似ている。」など、自分たちの身近な文化について考え、その大切さを感じ取ったようでした。さらに、アイヌの大学生がアイヌの文化を世界へ広めようと活動している映像を紹介すると、「アイヌの文化が魅力的だと分かった。」「アイヌの人たちのためにも私たちのためにもアイヌの文化は残していってほしい。」「アイヌの文化を次世代に残していこうと頑張っている姿から、私も自分たちの文化を大切にしたいと思った。」など、私たちが身近な文化を大切にすることと同じくらい、異文化であるアイヌの文化を理解し、尊重していこうとする考えを多くの生徒がもつことができました。



自分の言葉で書いて振り返る

2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

① 動機付け

- 導入の場面で、具体物(写真や動画等)を提示したり、比較したりすることで、興味や関心を高め、課題意識をもつことができた。その際、生徒の気付きやつぶやき、発表などから課題を設定した。
- 予想をもつことで、課題解決に向け、見通しをもって取り組むことができた。

③ 情報収集

- 配付資料の吟味・精選を行い、効果的な資料を用意した。そのことにより、課題解決に向け、見通しをもって取り組むことができた。
- タブレットの活用により、Web検索も含め、多様かつ大量の資料・情報がある中で、課題解決のために必要な情報を収集・選択・分析しながら、自力解決する力が身に付いた。

④ 考察・構想

- 自ら集めた情報や調べた資料を整理し、考える作業を行うことで、自分の考えをもつことができたようになった。その考えを基に、班員や班同士で他者との意見交換ができた。
- 学習支援アプリの活用により、他者に分かりやすく伝えようと工夫するなど、話し合いが活発になった。

成果と課題

● 成果

- 資料を調べ、考え、まとめるという資料活用能力が身に付いてきた。
- 特にタブレットの活用によって、どの生徒も積極的に調べようとする主体性や対話時における表現力が高まった。
- ニュースに興味をもったり、習得した知識を日常の中で結び付けて考えたりするなど、社会的事象に関する関心が高まってきた。

● 課題

- 1単位時間で「深い学び」まで到達することが難しい。資料から課題を見付けることだけでなく、資料から読み取ったことをこれまでの自分の考えと関連付けていくためには、導入部分で効果的な資料を精選し、焦点化して提示することで、思考する時間を十分に確保することが重要となる。
- 課題追究の場面では、収集した情報や資料から読み取った事実を基に、自分の考えを構築している。しかし、その考えを基に話し合いを行うまでに至らず、伝達で終わってしまうときがある。多様な意見や考えを出し合いながら、他者と自分の考えを比較・検討し、再構築したり、みんなでよりよい考えを創造したりするなど、思考を広め深めるためには、話し合いの場面はもとより、振り返りの時間での手立てを一層工夫する必要がある。

II (3) 中学校数学科 第3学年 単元名「円周角」 10/10

■ 単元及び題材について

本単元で扱う円は、これまでは、「1点から等しい距離にある点の集合」と捉える学習が中心であったが、ここでは「線分と角とで円が決定する」という新しい視点で円を見直し、理解を深めた。円周角と中心角の関係を理解し、図形についての様々な見方を経験させる指導が大切な単元である。

■ 本時のねらい

地図を利用した問題文から、条件に合った作図の方法を考え、根拠を明らかにして説明することができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 問題文と地図を照らし合わせ、条件を数理的に捉えさせる。
【日常や社会の事象を数理的に捉える】
- B ステップチャートを用いながら解決のための見通しをもたせる。
【既習事項を基に解決の構想を立てる】
- C 互いの意見を交換して考えを再考し、実際に作図させる。
【互いの考えを述べ、比較・検討する】
- D 作図方法を確認し、本時の学習を自分の言葉で振り返らせる。
【導いた結果を振り返って自覚する】



■ 授業場面より

■ 教材との出会い・課題設定

① 数理的な捉えと気づき

A【日常や社会の事象を数理的に捉える】

修学旅行で訪れる予定だった屋形船での隅田川の川下りと東京湾クルーズに思いを馳せ、「東京湾から東京タワーを正面に見ると、 30° 右の方向にインターコンチネンタルホテルが見えた。また、東京タワーとレインボータワーがちょうど重なって見えた。」という条件から、先生がどこにいるのかを探し当てるという学習課題に興味・関心を示しました。「2つのタワーが重なって見えたということは…。」「 30° 右に見えるということは…」というふうに、問題文の条件を図として捉えようとしていました。



■ 見通し・追究・解決

④ 解決の見通し ⑤ 計画の実行

B【既習事項を基に解決の構想を立てる】

問題文の条件にある 30° が地図のどの位置に作図されるのかを三角定規にある 30° の角を使いながら予想しました。既習事項を活用しその場所に 30° を作図するために、ステップチャートを用いながら考えました。

30° は 60° (正三角形)の二等分線でできるという既習事項は定着していましたが、円周角と中心角の關係に気付く生徒は少なく、かなり苦戦していました。それでもヒントを求めずに粘り強く考えたいという生徒が多く見られました。



見通し・追究・解決

⑥結果の検討

C【互いの考えを述べ、比較・検討する】

「2つのタワーが重なって見えたから一直線上でしょ。」「30°右だから、こうなるでしょ。(三角定規を当てる)」「60°の二等分線でしょ。」と、グループの仲間で予想したことを出し合い、根拠を明らかにしながら考え方の共有を図っていました。「これを正面に見たときに30°右に見えるということは…」と地図の見方や三角定規の当て方を確認し合う班もありました。



最終的に「円周角」というヒントから、中心角が60°となる円を作図する生徒が出てきて、各グループで検討していました。

まとめ・振り返り・新たな学び

⑦解決過程や結果の振り返り

D【導いた結果を振り返って自覚する】

「2つのタワーが重なって見えたから、先生は2点を結ぶ直線上にいます。」「東京タワーを正面に見ると30°右にホテルが見えたので、東京タワーとホテルを通る弧に対する円周角が30°になる円、つまり中心角60°の円を考えます。」「中心が分かったので、円をかき、直線との交点に先生がいます。」と説明しながら、実物投影機を使って作図の実演をしました。



「円周角や中心角、正三角形や垂線など、今まで習ったものをどう使っていかを考えるのが楽しかったです。」などと、それぞれ振り返りました。

2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

⑥結果の検討（全体での話し合い）

合同条件や相似条件の授業で、グループで話し合った結果から、互いに質問や意見を出し合い、正しい条件を自分たちの力で導き出した。

⑥結果の検討（グループでの話し合い）

グラフの特徴を学ぶ授業で、個々に考えてからグループになり、よりよい表現に改めたり、気付かなかった特徴を見いだしたりした。

⑧新たな疑問や推測（「数楽」レポート）

単元終了後に、日常の事象について数学を活用して考察する問題を提示し、レポートとして取り組ませた。（速算術の証明や黄金比など）

成果と課題

●成果

課題と既習事項や生活体験を関連付けることで見通しをもち、思考ツールを活用することで思考の過程や判断の根拠などを自分なりに考え、表現するようになった。また、グループや全体での話し合いによって、考えを深めたり、再構築したり、疑問を共有したりして、粘り強く思考するようになった。さらに、学んだことから新たに疑問をもち、日常生活に生かそうという意欲が向上した。

●課題

思考を中断させないためのヒントの量とタイミングが難しいと感じる。十分な思考時間の確保と時間配分が課題である。



II (4) 中学校数学科 第2学年 単元名「データの比較」 5/6

■ 単元及び題材について

本単元は学習指導要領の改訂で図られている統計教育の充実により、移行措置として2020年度から第2学年で指導する内容となっている。現代社会において、データに基づいて根拠をもって批判的に考察して判断したり、意思決定したりする能力が必要とされている。第1学年では平均値、中央値、最頻値などの代表値やヒストグラム、相対度数などについて理解し、データの大まかな傾向を読み取る学習をしている。第2学年において、前時までに四分位範囲や箱ひげ図の意味、箱ひげ図とヒストグラムのよさや問題点などを把握している。

そこで、本時では、与えられたデータを活用して図の傾向を読み取り、自分なりの根拠をもって考察するおもしろさや他者との比較により、多面的で批判的なものの見方を身に付けさせたい。

■ 本時のねらい

四分位範囲や箱ひげ図などからデータの分布の傾向を読み取り、自分なりの根拠をもって優勝候補を批判的に考察し、判断することができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 多様なデータの必要性を感じさせる課題を設定し、自分の立場を明確にさせることで、課題に興味をもち、追究しようとする意欲を高める。 **【興味や関心を高める】**
- B 既習事項を活用し予想した優勝候補の根拠を、見通しをもって調べさせる。 **【知識・技能を活用する】**
- C 自分が必要とするデータを抽出し、傾向をどのように読み取ったのか、根拠を明らかにして表現させる。 **【思考を表現に置き換える】**
- D 四分位範囲や箱ひげ図を活用した問題解決の過程を振り返る場面を設定することで、多面的にデータを吟味し、よりよい解決や結論を見いだすことよさに気付く。 **【振り返って次へつなげる】**

■ 授業場面より

■ 教材との出会い・課題設定

① 数理的な捉えと気付き

A【興味や関心を高める】

4クラス対抗の大縄跳び大会の優勝候補を予想する問題で、各クラスの5日間の練習回数のデータを基に作られた箱ひげ図から、どのクラスが優勝するかを予想しました。その後、付箋に自分の名前を書き黒板に貼りました。どのクラスが優勝すると予想したか、立場を明らかにすることで、予想の根拠をもつ必要性を高めさせました。「中央値が高いから3組だ。」「箱が右寄りだから4組だ。」などの意見を全体共有した上で、なぜそのクラスが優勝候補と本当にいえるのか、箱ひげ図だけで判断することは難しいことに気付かせ、課題を自分の事として追究する意欲を高めさせました。



■ 見通し・追究・解決

③ 課題の理解 ④ 解決の見通し

B【知識・技能を活用する】

自分の考えたことが本当に正しいといえるのかどうか、検討させました。調べていく過程の中で、考えが変わってもよいことを伝え、調べ始めました。電卓やヒストグラム、個々の練習回数のデータなどはあらかじめ印刷等して用意しておきました。



「他に4クラスのヒストグラムのデータがほしい」という声が起こり、全員に配付しました。他にも必要なデータがあるときは各自で持って行くよう指示をしました。個々の回数のデータから平均値を求めたり、度数分布表から階級値を求め分析したりするなど、なぜそういえるのか各々で追究しました。



見通し・追究・解決

⑤計画の実行 ⑥結果の検討

C【思考を表現に置き換える】

必要なデータを基にして導き出した優勝候補の根拠をペアで伝え合い、考えの違いに気付かせました。初めの予想と考えが変わった生徒は付箋を移動させるように声をかけると、6人が貼り直しました。この生徒の意見を含め、全体で様々な見方があることを共有しました。

「各クラスの平均値を求めると4組なんじゃない。」「ドットプロットが右側に偏っている3組では。」「度数分布表での最頻値は変わらない。その起こる割合を調べると4組が一番高いから。」「中央値が高いから3組だと思ったけど、平均値は4組だから…」などと、考えを発表していました。



全体の平均値だけ見ると4組だけど、最終日の平均値は1組が一番高いから1組じゃない？

まとめ・振り返り・新たな学び

⑦解決過程や結果の振り返り

D【振り返って次へつなげる】



自分の最終結論を確認した上で、授業の最後に、データの活用の仕方について、①新たな気付きや発見、②新たな疑問、③仲間のよさの三つの視点から、特に①の視点について

振り返りを行わせました。

- 友人の意見を聞いて自分が気付いていない事が見付けられた。
 - 平均値や分布の範囲を見ても、やはり自分の考えは変わらなかった。
 - 使う資料やデータによって考えが変わったので、どの資料に着目するのがよいのか分からず難しかった。
 - 箱ひげ図を見て思ったこととヒストグラムを見て思ったことが違った感じになり、セットで考えてみたいと思った。
- 生徒は、データの分布の傾向を多面的で批判的に見ることの素地を養うことができたと考えています。

2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

② 課題の設定

平方根の乗除の導入場面で、縦 $\sqrt{2}$ cm、横 $\sqrt{8}$ cmの長方形と1辺が2cmの正方形の面積の広さを比べる問題を提示した。 $\sqrt{2} \times \sqrt{8}$ の説明をどうすれば説明することができるか考え、方眼を用いて等積変形を行うことで面積が等しくなることを確認し、計算の仕方を自分たちで考えることができた。

⑧ 新たな疑問や推測

普段生徒が体育館で目にしての自分たちのスポーツテストのシャトルラン等の記録を用いて、「自分の学校の生徒の体力は以前と比べてどうなっているのか」という課題をもたせた。

そして今年度だけではなく、昨年度や一昨年度のデータとの比較、他学年との比較、他種目との比較など、自分なりの視点をもたせ、分析することで、身近な事象と数学の世界を関連付けて考えさせることができた。



成果と課題

● 成果

- 付箋を用いて自分の立場を明確にすることで、自分の意見に責任をもち、その根拠を見付け説明しようと粘り強く取り組む姿が見られた。
- じっくりと自分の考えを深める場面を確保しつつ、他者の意見を聞くことで、自分の考えが確かになっていく感じが感じられた。

● 課題

- 解決への手立てとして、どのようなデータが必要か、見通しをもてないままいくつもデータを集めてしまったことで、どうしたらよいか分からず困っている生徒も見受けられた。前時まで、チームごとにデータの種類や配付データを変えて検討させ、着目する視点により異なる結果が導き出せる事を知ること、根拠を求めるために必要なデータを自分で選ぶことができるようになって考えられる。
- 生徒の発言をつないで、疑問や問いから課題を設定し、問題解決方法など気付かせることで、自分の事として課題を解決する楽しさを味わわせていきたい。



■ 単元及び題材について

本単元は、電流から光や熱を取り出せること及び電力の違いによって発生する熱や光などの量に違いがあることを見いだし、日常生活や社会と関連付けて理解させることがねらいである。

電力について初めて学習する生徒にとって、電力の単位であるW（ワット）という言葉にはなじみがあるものの、電流や電圧と比べて、電力というエネルギーの概念を生徒がイメージしにくいことが多いことに課題を感じていた。

従来、電熱線などで発生する熱の量を確かめる実験から電力の学習が始まることが多いが、電力の単位W（ワット）を一番身近に感じられる電球を単元の初めに扱い、光の明るさという可視化できるものから学習することで、生徒が見通しをもちながら学習に取り組めると考えた。

■ 本時のねらい

フィラメントの太さで電気抵抗の大きさが変わり、そのことによって流れる電流が変化して、消費する電力も変わってくることを、図や言葉を用いて説明することができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

A 電力の異なる2種類の電球（40Wと100W）の光り具合（明るさ）が変わることを確認し、電球の電力の違い（光の明るさ）は何によって生じるかに疑問をもたせる。

【身近な物理現象を観察し、問いをもつ】

B 2種類の電球の形状を比較させることで、相違点に気付かせ、フィラメントの太さの違いが光り具合（明るさ）に関係しているのではないかといった予想につなげる。また、「フィラメントの太さが太いほど抵抗が小さくなり、電力が大きくなるだろう」という仮説を立てさせる。

【既習事項を基に科学的な根拠をもって予想する】

C 電球の形状をもとに立てた予想や仮説が、定量的なデータを根拠として正しかったことに気付かせるとともに、考察に重点を置いた言語活動を行わせる。

【複数の検証結果から規則性を見いだす】

D 自分の考えを班員に説明したり、質疑応答し合ったりしながら、互いの考えを比べたり、共に考えを創り上げたりさせる。

【図や表にまとめて発表する】

■ 授業場面より

■ 課題の把握（発見）

①身近な物理現象に対する気付き ②課題の設定

A【身近な物理現象を観察し、問いをもつ】

家電量販店に買い物に行くと、たくさんの種類の電球があり、電力（W）の違いによって光の明るさが違うということを生徒は日常生活で体験しています。しかし、どのような原理や仕組みで電球の明るさが変わっているのかが分からず、自然と疑問の声が上がりました。そこで、電球のつくりと電力の違いの関係性を明らかにしていくことが本時のねらいになりました。



このように、生徒の疑問から生まれた課題を設定することで、関心・意欲をもって学習に臨めるように工夫しました。

■ 課題の探究（追究）

③予想や仮説の設定 ④検証計画の立案

B【既習事項を基に科学的な根拠をもって予想する】

予想をする際は、実際に2種類の電球（40Wと100W）の形状を見比べ、比較することで相違点に気付かせながら、「フィラメントの太さ」が電力の違いにつながっていると予想しました。そして、「フィラメントが太いほど、抵抗が小さくなり、大きな電流が流れるから明るく光るはずだ」という仮説を立てさせてから検証実験につなげました。既習事項のオームの法則を活用したり、電圧の大きさを変化させないこと（条件制御の概念）を確認させたりすることで、科学的に探求しようとする態度を養えられるよう留意しました。



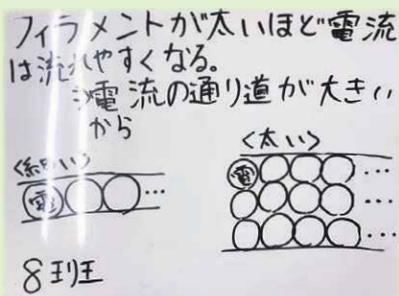
■ 課題の解決

⑦ 考察・結論 ⑧ 表現・伝達 ⑨ 学習の振り返り

C【複数の検証結果から規則性を見いだす】

8班分の実験結果を黒板にまとめ、全員が他の班の結果を一覧できるようにしました。複数の検証結果があることで、自分が見いだした規則性に客観性が生まれて、自信をもって考察できるよう支援しました。

どの班もシャープペンシルの芯の太さが太いほど、同じ電圧を加えたときの流れる電流の大きさが大きくなることを知り、なぜシャープペンシルの芯が太いほど電流が流れやすいのかについて、生徒は個々に一生懸命考えていました。その際、2つの抵抗器を直列につないだ場合と並列につないだ場合の合成抵抗の学習を思い出し、ストーリーをイメージしながら、考察できている生徒が多かったです。

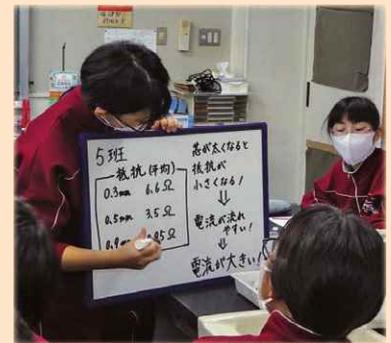


■ 課題の解決

⑦ 考察・結論 ⑧ 表現・伝達 ⑨ 学習の振り返り

D【図や表にまとめて発表する】

考察したことを班員(少人数)との言語活動を通して分かりやすくまとめ、互いに考えを述べたり、多角的な視点から意見を再考したりしました。そして、班で深めた考察を他の班の仲間に対して説明する活動を行いました。その際、本時ではまず2つの班同士で意見交換を行いました。この活動のねらいとしては、いきなり全体の場で説明するのではなく、少人数での話し合いを通して、聞く側が図やモデル図を近くで見ながら説明を聞いたり、分からないことを質問したりして、理解の一助とすることです。実際に話し合いは各班で活発に行われ、様々な意見を聞いて考えを深めることができていました。



■ 2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

① 自然事象に対する気付き

モーターを分解して中の構造を確かめさせたり、切れてしまった蛍光灯を割って電球との違いを考えさせたりするなど、生徒に直接観察させたことが、相違点への気付きや疑問を見いだすことにつながっていた。

導入部分では、生徒にとって身近な物を扱うこと、そして事象の構造を可視化するなどの手立てをとり、気付きや疑問を自ら見いだすようにすることが、主体的に学習に取り組むことにつながることを改めて感じた。



⑥ 結果の処理 ⑧ 表現・伝達

ホワイトボードの活用が定着し、「見やすく」「分かりやすく」に配慮しながら、共に考えを創り上げたり、協働して課題を解決したりする活動がスムーズに行われるようになった。また、素早くまとめる力や多様な手段で説明する力が向上している。全体の場で自分の考えを発表することに対する抵抗感が少なくなってきた。

成果と課題

● 成果

この「電流と電圧」という単元は、例年、水の温度を上昇させる実験から単元が構成されている。しかし、熱は目に見えず、イメージしにくかったり、実験結果に誤差が生じやすかったりするため、学習の定着が難しい単元であった。そこで、授業スタンダードを基にした今回の授業のように、生徒の疑問から生まれた課題を設定したことが、追究意欲を喚起させ、見通しをもたせることや検証計画を立案させることにつながった。

また、得られた知識や技能を基に学習を振り返らせることで、次時の学習意欲にもつながり、スムーズに授業を展開できることが分かった。

● 課題

実験を行う際、シャープペンシルの芯が簡単に折れないように、実験器具の工夫(芯の固定)をして、やり直しによる実験時間の延長を防ぐことが課題として挙げられる。このように、生徒の思考が止まらないように円滑に実験ができるような支援が必要不可欠である。

また、授業の展開においてスタンダードの観点を取り入れすぎて時間が不足しないよう、生徒の学習活動を工夫し、確実に身に付けさせたい資質・能力を見極めることが大切である。

II (6) 中学校外国語科 第3学年 単元名「Lesson6 Interesting Languages」 3/7

■ 単元及び題材について

本単元は、「ことば」そのものに対する考えを深める内容である。いくつかの日本語は海外でも使われるようになって久しいが、「布団」や「カラオケ」などが以前から英語として使われているということは意外に知られていない。こういったことに触れ、「ことば」の面白さや豊かさなどを感じることができる授業にしたい。

■ 本時のねらい

日本語に由来する英単語について教科書本文を通して学ぶことによって、同じ単語でも意味が異なる言語の面白さを知り、その違いを相手意識をもちながら英語で伝えることができる。

■ 主体的・対話的で深い学びの視点

- A 既習内容を繰り返し使う帯活動を通して、英語でやり取りさせる。
【振り返って次へつなげる】
- B 本文の概要を確認し、相手に伝えることを意識して音読させる。
【知識・技能を習得する】
- C 言語活動に複数回取り組ませる。
【知識・技能を活用する】
- D 本時の目標及び学習到達目標に沿って振り返らせる。
【思考して問い続ける】



■ 授業場面より

■ 教材との出会い・課題設定

①あいさつ・Warm-up・帯活動・Small Talk・課題の設定

A【振り返って次へつなげる】

毎時間の帯活動として前時のwriting活動で多かったミスを取り上げ、学級全体で共有することで気づきを促し、正しい英文を書けるようにしています。また、前時に行ったQuick Response Q&A ver. (本文に関するペアでのQ&A活動) に再度取り組むことで、重要表現の活用や定着につなげました。

導入では、課題提示のために新ALTからのビデオを見せました。生徒たちはこれから自分たちと関わる新ALTからの問いかけに真剣に耳を傾け、理解しようとしていました。こういったオーセンティックな教材と実生活に即した課題が生徒たちの興味・関心を高め、主体的に取り組もうとする意欲につながりました。



ペアで帯活動に取り組む様子

■ 見通し・追究・解決

②Reading

B【知識・技能を習得する】

課題提示後は、すぐにChallenge Talk1 (ペアで課題に挑戦する場) に取り組みました。このプロセスを踏むことで、今の自分が表現できることとできないことがはっきりしました。できなかった部分を意識し、何を伝えればよいのか全体で共有し、教科書本文の内容を絵とマッチングさせる活動を行ったり、重要な表現や文法事項を確認したり、課題達成のために生かせそうな英文に線を引いたりしました。Challenge Talk2では、こうした流れの中で学んだ英文を活用することで、自然な対話を目指しました。さらに、各ペアの対話を全体で共有することで、生徒同士がより質の高い対話を目指すように働き掛けました。



課題達成のために生かせそうな英文を探す

見通し・追究・解決

③Activity I

C【知識・技能を活用する】



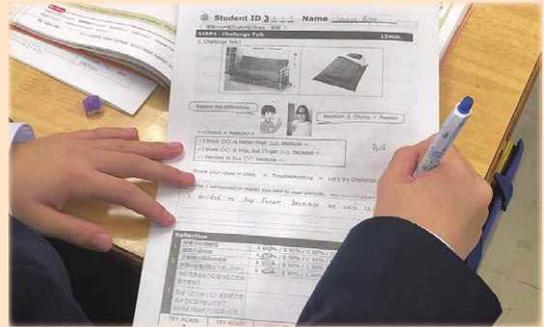
言語活動に複数回取り組むことで、生徒たちは獲得した知識や技術をどのように言語活動で生かしていけばよいのか分かるようになります。言語活動に取り組んだ後は必ず全体で共有し、中間評価や指導を行います。Challenge Talk2の後は、課題解決の手掛かりとなる表現を含んだQ&A練習を行い、表現の幅を広げることができました。また、課題解決に使えると思った教科書の表現や仲間のアイデアをメモしてChallenge Talk3に生かしました。発表を全体で共有し、課題から考えられる様々な対話の方向性を示すことで、生徒は「本当にそれで伝わるのか」と自ら問いました。

まとめ・振り返り・新たな学び

④Activity II ⑤振り返り

D【思考して問い続ける】

本時のまとめとして、自分が表現した内容の中から、言語材料を含む英文を2文以上writingしました。このwritingにより、自分が即興で伝えていた英文や文法がどうだったのかを改めて考え直しました。



振り返りでは、その視点を示すことで、今日できるようになったことは何か、それができるようになったのはなぜか（プラスになった点など）を考えました。こうして、生徒一人一人、本時での自らの変容を再認識し、それを次の学びにつなげようとしていました。

2年間の授業実践を通して

これまでの指導事例から

②Reading（読解力をサポートするモデリング）

教科書や長文を読む際には、内容に関わるQ&A形式の問題がよく出題される。答えにたどり着けない生徒を支援したり、本当に内容を理解して答えたのかを確認したりする手段が必要である。そのために教師が解答に結び付く質問を道筋を立ててすることが効果的である。例)「誰がしたの?」「いつ?」「何のために?」のように関連する質問を生徒と英語でやり取りし、解答に迫る支援をする。

③Activity I（教師とのやり取り）

ペアで言語活動に複数回取り組むと、生徒はある程度のレベルのやり取りができるようになる。この段階になったら、指名した生徒（英語が得意な生徒）と教師やALTが言語活動を全体の場で実際にやって見せることにより、新たな視点が生まれる。教師は5W1Hを意識して指名生徒とやり取りをし、対話を自然な流れの中で様々な方向に転換する。

④Activity II（相手意識のある技能統合）

以下の3つの視点を基にwriting活動とreading活動を設定する。フィードバックがあることが前提であるため、生徒は相手意識をもって表現するようになる。

- What can students write in class? (blog/poster/E-mail)
- Who can read students' writing? (classmates/teachers)
- Why will they read it? (add a comment/reply)

成果と課題

●成果

言語活動重視の授業を行うことで、文法事項のドリル学習の時間や表現を定着させる時間をどのように確保するのが取組前の懸念事項であった。しかし、単元の最終ゴールを生徒と共有し、その達成のために授業を組み立てることで毎時間同じ方向性の活動に取り組むことができ、表現の定着も図ることができた。

また、Challenge Talkに取り組んだことで、「活動→評価・指導→活動」といった効果的な学習過程がくれ、既習事項の定着や表現力の向上につながった。

●課題

ALTと生徒が実際に対話したパフォーマンステストでは、生徒側から話しかけることはできても、ALTの話を理解できずに会話がストップしてしまった例もある。即興のやり取りを継続して行うためには、相手の話を理解し、返答していく力を育てる必要がある。こういった部分に教師の見取りの視点を置き、生徒にフィードバックしていくことが求められる。



■ 単元及び題材について

本単元は、物語の心に残った場面について、音読劇を発表し合う活動である。「登場人物になりきる」という児童にとって分かりやすい視点を与え、登場人物に同化して読むことを促し、叙述や挿絵から分かること、またはそこから想像したことを音読と動き（人物同士の位置、簡単な動きなど）に表せるようにしたい。その際、人物の行動や会話の叙述の中から、気持ちを読み取るための言葉や表現に着目して考えさせ、人物の悲しみ、優しさの理由を説明させる活動を行うようにする。

教材文とともに、「ふたりは」シリーズの作品を取り上げ、並行読書教材として用いる。「お手紙」と同じ登場人物の物語を読むことは、読書の楽しさを味わうきっかけとなる。また、人物の行動や会話に表れる優しさ、ユーモアなどについて、「お手紙」との共通点や相違点を話し合うことで、登場人物の関係性を考えていくことにもつながると考える。

■ 本時のねらい

手紙のことを言うてしまうかえるくんの優しさと、手紙の内容を知ったがまくんの喜びについて話し合うことによって、人物の行動や様子を想像しながら、2人の「とてもしあわせな気持ち」の理由を書き分けることができる。

■ 学校図書館活用の視点・工夫

- 単元学習中、目的意識をもって主体的に読むことができるよう、本校学校図書館、学級文庫では足りない冊数を市民図書館から借り、児童数分以上を確保して教室に常備する。
- 複数の本や文章を関係付けて読み、教材文だけでは見えてこない登場人物の人物像や関係性を捉えることができるよう、「やさしさを見つけて読む」という観点をもたせてシリーズ作品を紹介する。
- 友達の読書に対する態度に影響を受けたり、読書後の感想を交流する機会を増やしたりするために、並行読書の記録や感想をブックリストに記入する。

■ 授業の実際

■ 授業の流れ

【前時までの流れ】

- 音読劇を見せ合うという単元のゴールを確かめ、人物の行動や心情についての理由を叙述や挿絵を根拠にして話し合い、自分の考えをまとめる。

【本 時】

- 導 入
 - 前時で学習した場面のかえるくんの優しさや学んだ読み方を想起する。
- 展 開

2人の「とてもしあわせな気持ち」は、同じかを考えよう。

- かえるくんの優しさが分かる言葉や文に着目させ、人物の行動や様子について話し合う。
- 2人の「とてもしあわせな気持ち」の理由を話し合い、自分の考えを書く。

● まとめ

2人が「とてもしあわせな気持ち」になったわけは、ちがう。がまくんがしあわせな気持ちになったから、かえるくんもしあわせになった。

でも、親友であることをうれしく思っている気持ちは、同じ。

【本時後】

- 教材文の音読劇発表後、並行読書教材の中から音読劇にしたい場面を選び、音読や動きの工夫を考え、グループで練習する。
- 音読劇発表会を行い、感想を交流する。

■ 学校図書館活用の視点・工夫、児童の取組

● 並行読書との関連

- 教材文「お手紙」の人物が優しいことから、優しさを見付けながら並行読書教材を読み、ブックリストに記入することを確認する。
- 前時の学習や人物像を想起するために、前時の振り返りやブックリストを児童数名に読ませる。
- 手紙のことを言うてしまうかえるくんの優しさについて、並行読書教材のかえるくんの優しさと比較しながら話し合うように働きかける。



- グループごとに、3つの役（かえるくん・がまくん・語り手）を交代したり、見せ合ったりしながら音読劇を練習させ、人物の行動や心情を想像しているかを確認させる。

Ⅲ (2) 小学校国語科 第1学年 単元名「たのしんで本をよもう」13/15 (1年目の取組)

■ 単元及び題材について

主教材「お手がみ」は、1970年にアーノルド＝ローベルが発表した「ふたりはともだち」に収録されている作品の一つである。この「お手がみ」は、他の作品同様、かえるくんとがまくんの会話がテンポよく描かれており、挿絵も相まって場面の様子を想像することは1年生にも難しくない。物語を繰り返し読むことで二人の関係がより深いものであることが推察でき、そのことが児童にとって自己の友人関係を改めて見つめ直すきっかけになることが期待される。

■ 本時のねらい

学校図書館にある本の中から「友達」をテーマに選書したものを司書の先生に紹介してもらい活動を通して、読みたい本を自分で選んで読むことができる。

■ 学校図書館活用の視点・工夫

- ・本単元の学習に当たり、外部司書を招く。そして、児童が進んで本を読むようになるために、司書の先生に「友達」をテーマに選書していただき、学校図書館活用への布石とする。
- ・司書の先生によるブックトークを聞くことで、紹介していただいた本の中から、自分が読みたいな、楽しそうだなと思う本を見付けることができるようにする。

■ 授業の実際

■ 授業の流れ	■ 学校図書館活用の視点・工夫、児童の取組
<p>【前時までの流れ】</p> <ul style="list-style-type: none">・がまくんとかえるくんの関係を理解した上で作品の世界を想像しながら読み、好きなところを紹介する。 <p>【本 時】</p> <ul style="list-style-type: none">● 導 入<ul style="list-style-type: none">・前時までの学習を振り返り、がまくんとかえるくんが親友であることを確かめる。● 展 開<ul style="list-style-type: none">・司書の先生によるブックトークを聞く。・司書の先生が選んだ本の読み聞かせを聞く。・司書の先生が紹介した本の中から1冊を選ぶ。● まとめ<ul style="list-style-type: none">・選んだ理由について振り返る。 <p>【本時後】</p> <ul style="list-style-type: none">・自分が選んだ本について、好きなところを友達に紹介する。	<ul style="list-style-type: none">・ テーマによる選書 単元に入る前に、司書の先生に「友達」をテーマに選書していただく。・ 学級文庫の配架の工夫 アーノルド＝ローベル作の作品コーナーを教室内に設置し、いつでも手に取ることができるようにする。・ 外部司書の招聘 司書の先生によるブックトークを聞き、友達をテーマとした本が学校図書館にたくさんあることを知る。また、司書の先生に紹介していただいた本の中から自分が読みたいと思う本を1冊選ぶ時間を確保する。・ 学習の成果物コーナーの設置 児童が読んだ本と、好きなところを書いたワークシートを学校図書館内に展示する。 

第2学年 単元名「自分だけのおにをしょうかいし合おう」11/12 (2年目の取組)

■ 単元及び題材について

本単元では、まずだれもが知っているであろう主教材「ないた赤おに」を、改めて赤おにと青おにの心のつながりを中心に読ませることで、登場人物の行動を具体的に想像させる。主教材での学びが読書活動に結びつくようにするために、児童が興味を示している「おに」が出てくる物語について、お気に入りの場面に題名を付け、絵を描かせる。そして、それを伝え合う活動を設定する。

■ 本時のねらい

「読むこと」において、自分が選んだ本を読んで感じたことや分かったことを発表し合い、質問をしたり感想を伝え合ったりして共有することができる。

■ 学校図書館活用の視点・工夫

- ・第三次のはじめに、学校図書館に出向き、おにが出てくる本を探す活動を設定する。これまで利用した経験を生かし、題名に「おに」が付いている本を探させるようにする。

- 常駐の司書が不在のため、掲示板を用いて本を探してほしい旨を呼びかけ、全校児童が司書の代わりに本を探す活動に取り組ませることで、学校図書館をより自分たちのものとして実感できるようにする。
- お気に入りの「おに」の本のお気に入りの場面について描いた絵を「おにびじゅつかん」と称して学校図書館に展示することで、自分たちで学校図書館を作る活動の一環として位置付ける。

■ 授業の実際

■ 授業の流れ

【前時までの流れ】

- 「ないた赤おに」を読み、お気に入りの場面について、挿絵を選び、叙述を基に題名を付ける。
- 「おに」が出てくる本を探す。

【本 時】

- 導 入
 - 前時までの学習を振り返り、お気に入りの場面を選んだ理由を確かめる。
- 展 開
 - 自分が選んだ本のお気に入りの場面について、描いた絵について発表し合う。
- まとめ
 - 対話を通して、同じ「おに」でも、いろいろなおにがいることに気づき、自分なりの考えをもつ。

【本時後】

- お気に入りの場面を描いた絵を「おにびじゅつかん」として学校図書館に展示する。
- 友達が紹介した本の中から読みたいと思う本を選び、読む。

■ 学校図書館活用の視点・工夫、児童の取組

- 学校図書館に向かう場の工夫と全校児童への呼びかけ
題名や内容に「おに」が出てくる本を探す。掲示板を用いて全校児童にも探してもらう。



- 学習の成果物コーナーの設置

学習の成果物を学校図書館に展示することで、学校図書館を自分たちで作る活動の一環として位置付ける。



■ その他の学校図書館活用の取組

1 朝読書タイム

始業と同時に全校児童及び全職員が15分間読書に向かう時間を設定している。1年生の1学期は読み聞かせを中心とした活動になるが、2学期以降は学校全体が読書に浸る時間として機能している。また、月に一度は、全職員が当番制で読み聞かせ会（上下学年別）を開いている。

2 家庭読書の推進

毎週月曜日は、全学年が宿題を読書とし、家庭学習カード等に読んだ本を記録していく。月曜日は、児童会図書委員会による本の貸出日になっており、学校図書館の本を借りて家に持ち帰り、読むことができる。

3 読書の木

個々の読書経験の交流の場として、玄関ホールに「読書の木」を設置している。自分が読んだ本の中から全校

児童に紹介したい本を花や葉に書き、それを貼っていくことで、満開の桜の木になっていくよう工夫している。



4 マイブックカード

6年間の読書記録を1冊のファイルにしていける。朝読書を中心に読んだ本の記録を書いていく。児童会図書委員会による多読賞の表彰もあり、意欲の喚起につながっている。

■ 成果と課題

1 成 果

- テーマによる関連図書コーナーの設置等、配架を工夫したり、自分たちの成果物を展示したりすることで、学校図書館をより身近なものとして位置付けることができた。また、継続して成果物を展示することは、前年度の学びを参考にすることができ、次年度以降の学びにも効果的であった。
- 掲示板を用いて本を探すことを全校児童に呼びかけることで、個々の読書経験を生かした活動を行うことができた。

2 課 題

- 児童自らが目的をもって学校図書館を活用する際、教師が意図した配架は、時に親切すぎて、欲しい本がすぐに見付かってしまうことがあった。児童が自分で本を探す力を育てる必要がある。
- 選書の偏りという課題を解決するために、選書の仕方を中心に活動してきたが、本の読み方についても、低学年の段階でしっかりと指導していく必要がある。

■ 単元及び題材について

本単元の目標は、経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にすることができることである。

本単元では、これまで学んできた教材文や読書経験を基にして、自由に想像を膨らませて物語を作成していく。そうすることで、語彙を豊かにすることも可能であると考え。これまで読んだ本の中から、より楽しいおすすめの本を持ち寄り紹介し合う活動を取り入れることで、楽しいお話の秘密（どんな出来事が起こると楽しい話になるか）を話し合い、見つけた秘密を自分の物語作成に生かしていきたい。継続してきた読書の取組により、物語作成に意欲をもたせ、より楽しくストーリーの想像を広げられるようにしていきたい。

出来上がった作品を下学年の児童に読み聞かせをするという相手意識をもたせることで、より一層、詳しく書いたり、分かりやすく書いたりすることが期待できる。推敲も主体的に行うようになるのではないかと考えられる。自分で作った物語を読んでもらい、感想をもらうことで、書いてよかったという達成感も味わわせたい。

■ 本時のねらい

おすすめの本を紹介し合うことを通して、どんな出来事が起これば楽しいお話になるのか考え、「中」の出来事を簡単に書くことができる。

■ 学校図書館活用の視点・工夫

- 物語の出来事を考えるためのヒントになるように、これまでに書き溜めた「おすすめの本しょうかいカード」や「読書ちよきんつうちょう」の中から、楽しい本を紹介する活動を組み入れる。どんな登場人物が出て、どんな出来事が起こるかを伝え、お話の「中」の出来事のイメージを膨らませるようにする。これまでの読書経験を基にストーリーの想像を広げられるようにする。
- おすすめの本は、学校図書館、ワークスペース、学級文庫や教師の本から、好きなものを選んで読ませる。学級文庫には、人数より多めの本を用意しておく。
- 「読書ちよきんつうちょう」に、これまで読んだ本を記録させておく。

■ 授業の実際

■ 授業の流れ

【前時までの流れ】

- 学習計画を立て、見通しをもつ。

2年松組図書館を開こう！
～さくしゃになって、楽しいお話を書こう～

- 絵を見て、登場人物の名前やどんな人物かを考える。
- 題名・作者・登場人物・出来事・好きな場面を入れて、おすすめの本の紹介文を書く。

【本 時】

● 導 入

おすすめの本を紹介し合う。(グループ)

● 展 開

どんな出来事が起これば楽しいお話になるのか考える。

〈児童の意見〉

- ものや人がいっぱい出てくる。
- 宝物を探す。
- ぼうけんする。
- 何かに変身する。

■ 学校図書館活用の視点・工夫、児童の取組

• これまでの読書の取組との関連

物語の出来事を考えるためのヒントになるように、これまでに書き溜めた「おすすめの本しょうかいカード」や「読書ちよきんつうちょう」の中から、楽しい本を紹介させ、どんな出来事が起こると楽しい話になるか、考えさせる手立てとする。

	よみはじめ～ よみおわり	本のだいる	ひとこと(かんそうなど)	おすすめ度
1	1/8	～ほろもそのお話をきいた	キラキラと光る魔法の杖の力でまじまじとべんごの魔法を	☆☆☆
2	1/8	～おかいだてのいえ	おかいだてのいえはかえるとおかいだてのいえのおまじない	☆☆☆
3	1/8	～ふくわうろ おにそうろ	おにがわうろとエビのおにがわうろとまじまじ	☆☆☆
4	1/8	～たんたしおにいふんなんだ	たんたしおにいふんなんだはたんたしおにいふんなんだのおまじない	☆☆☆
5	1/8	～まよなかのたんじょう日	まよなかの12時にたんじょう日かまじまじ	☆☆☆

読書ちよきんつうちょう
読んだ日、本の題名、感想、おすすめ度を記入。20冊読むと認定書がもらえる。

- ドッキリが起こる。
- 不思議なものに出会う。
- 人より大きくなったり小さくなったりする。
- けんかをする。
- 悲しいことが起こる。
- なぐさめる。



●まとめ

意見を参考に、お話の出来事を簡単に書く。

【本時後】

- お話の「おわり」を考える。
- 友達と交流し、さらに内容を膨らませる。
- 出来事の様子が詳しく分かるよう、お話を完成させる。
- 出来上がったお話について1年生に読み聞かせをする。



おすすめの本を紹介し合う様子



1年生に読み聞かせをしている様子

■ その他の学校図書館活用の取組

- 1 朝読書（月・火・金 8:00～8:10）
- 2 児童会図書委員会による活動（随時）
- 3 教員による読み聞かせ（年2回〈前期・後期〉）

前期は、学級担任が読み聞かせをする。後期は、児童に本を選ばせ、複数の教員が読み聞かせをする。どの教員がどの本を読むかは、教室に行かないと分からない。



- 4 図書館ボランティアによる読み聞かせ（火曜日 年25回程度）
- 5 地域団体「おはなしの会」による読み聞かせ（年5回程度）

■ 成果と課題

1 成果

- 普段の読書経験が生かされ、楽しいお話になる出来事をたくさん考えることができた。
- 「おすすめの本を紹介し合う」活動をすることによって、友達の読んだ本を学校図書館から借りたり、これまで手に取らなかったジャンルの本を読むようになってきたりなど、読む本の幅が広がってきた。
- 日常の読書の取組を生かした単元を構想したことで、児童がより想像を膨らませてお話を書くことができた。今後も主体的な読書活動を取り入れた単元づくりを行っていきたい。

2 課題

- 国語科以外でも学校図書館の活用ができるよう、指導を工夫する必要がある。
- これまでの取組を継続できるよう、全職員での共通理解を図ることが大切である。
- 偏りのない選書となるよう努めていく。



■ 単元及び題材について

本単元は、第二次世界大戦下のオランダで、アンネ・フランクが13～15歳の時に書いた日記の内容である。この本文を通して、間接疑問文の用法について学ぶ。生徒は、自分たちと近い年齢にありながら異なる環境にいる少女の日記を読むことで、自分の置かれている環境や将来について考えることができる。

これまで、マザー・テレサ、西岡京治、スティービー・ワンダーなど、様々な分野の著名人について英文を読んできた。そしてそのたびに、その人物について感想を書き、考えたことをディスカッションしてきた。本単元では、アンネ・フランクの人生について考えたことを伝え合った後、教科書から離れ、「人生について話を聞き、学びたい人」について図書を使って調べ、班でディスカッションし、一人に決めるという発展的な活動を設定した。その際、単元最後のChapter4 Project「自分の意見を言おう」で学習する表現を使い、自分の意見に理由付けしたり、前の人の意見に賛成・反対を示したりしてディスカッションがスムーズに行われるよう配慮した。

■ 本時のねらい

- (1) 間違いを恐れず、積極的に自分の考えを伝えたり、相手に尋ねたりして、ディスカッションを行うことができる。 **【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】**
- (2) 既習事項を使って、自分が選んだ人物について、表現することができる。 **【外国語表現の能力】**
- (3) 相手が話している人物について、内容を理解することができる。 **【外国語理解の能力】**

■ 学校図書館活用の視点・工夫

- ・生徒自身が人生について話を聞き、もっと学びたい人について、興味・関心のある人物を調べることで学習意欲を高める。
- ・学校図書館を利用し、図書や様々な資料を使って、友達と協働的に学習することで学びを深める。
- ・より多くの本と出会うことによって、その中から自分が必要とする情報を比較・選択するなど、精選する力を身に付ける。

■ 授業の実際

■ 授業の流れ

【前時までの流れ】

- ・単元のゴールであるディスカッションについて見通しをもつ。
- ・新出文法及び本文の内容を理解する。
- ・アンネ・フランクや第2次世界大戦について自分の考えを整理する。
- ・尊敬する人物について調べ、レポートにまとめる。
- ・ペアでディスカッションの練習をし、フィードバックをする。



■ 学校図書館活用の視点・工夫、生徒の取組

- ※生徒自身が興味・関心のある人物を調べることで、学習意欲を高める。
- ※自分が尊敬する人物について、図書やインターネット等を使用して調べ、まとめる。



レポートをまとめる生徒

【本 時】

● 導 入

- One-Minute-Talk
「Which do you like better, bento or school lunch ?」をテーマに、ペアで warm-up する。

● 展 開

- 学習課題を確認する。
- 班ごとに人物を決定する際の観点を確認する。
- 前時のフィードバックから、本時において改善すべき点を確認する。
- 班でディスカッションし、「話を聞きたい人」を一人決定する。

● まとめ

- 決定した人物の共有と振り返りをする。

【本時後】

- 単元全体の文法事項や表現等を振り返る。



ディスカッションする生徒



本時の板書事項

■ その他の学校図書館活用の取組

1 多目的ホールにおける新聞コーナーの設置

いつでも誰でも利用できるように職員室前のスペースに、机と椅子を配置している。机の上には地元新聞を置き、生徒が気軽に読むことができるようにしている。



2 英字新聞『alpha』の学級配付

毎週、学級ごとに英字新聞『alpha』を配付し、生徒が休み時間等を使って、時事問題から英語にふれることができるようにしている。



■ 成果と課題

1 成 果

- 昨年度（ポスターセッション）、今年度（ディスカッション）とともに、教科書から離れた発展的な内容を扱ったため、生徒にとってAuthentic（ほんもの）でPersonalized（自己関連的）な活動となった。
- 学校図書館を活用して情報を調べることで、知りたい情報の分類を意識したり、友達と相談しながら情報を精選したりする力が身に付いた。
- PCに向かい、インターネットを使って一人で調べるのとは異なり、図書を使って生徒同士で学び合いながら調べていくことで、考えを広げ、深めることができた。
- 学校図書館を活用した授業を実践することで、学校図書館に対する周りの教員の意識改革につながった。

2 課 題

- 学校図書館を活用することで、生徒の学びが深まり、教師としても手応えを感じることができているが、現実的にはその活用が不十分であるのが現状である。学校図書館というと、社会科や国語科で活用されている印象が強いが、どの教科・領域でも活用できるようにすることが大切である。そのために、年間指導計画に位置付けたり、学校司書や司書教諭と連携したり、学校図書館の活用実践例を学校全体で共有したりしていきたいと考える。



Ⅲ (5) 中学校社会科 第3学年 単元名「地方自治とわたしたち」 4/6

■ 単元及び題材について

学習指導要領においては、個人の尊重と法の支配、民主主義など、法に基づく民主政治の基本となる考え方に関する理解を基に、民主政治の推進と、公正な世論の形成や選挙など国民の政治参加との関連について考察、構想し、表現することができる適切な問い（例えば、議会制民主主義が取り入れられているのはなぜか、民主政治をよりよく運営していくためにはどのようなことが必要か、自治とは何か）を設け、それらの課題を追究したり解決したりする活動を通して、地方自治や我が国の民主政治の発展に寄与しようとする自覚や住民としての自治意識の基礎を育成することを主なねらいとしている。

本単元では、地方自治の仕組みについて学習した後、東通村をよりよくするための条例案の作成を行う。現在の東通村の特色を、学校図書やインターネット、新聞等を活用して情報収集し、さらによくしていきたい点や課題を見付けていく。その際、既習事項である「情報リテラシー」についても触れながら、情報を正しく読み取る力を身に付けさせたい。また、作成した条例案を地方財政の面から考察したり、中学生が住民参加をする方法として「こども議会」を紹介したりする活動を通して、地域の住民としての自治意識を育てていきたい。

■ 本時のねらい

- 東通村の地域の特色や課題を深く考察し、東通村をよりよくするような条例案を作成する活動を通して、地方自治の課題について対策を考え表現することができる。
- 学校図書やインターネット、新聞等を使い、有用な情報を適切に選択して活用することができる。



■ 学校図書館活用の視点・工夫

- 学校図書やインターネット、新聞等を活用し、さまざまな媒体から適切な情報を得ることができるよう支援する。
- 図書の選定や東通村の統計、他の地方公共団体の取組についての資料収集及び授業における資料の見方や調べ学習の進め方について、司書教諭と連携して指導する。

■ 授業の実際

■ 授業の流れ

【前時までの流れ】

- 地方自治の仕組みについてまとめる。
- 条例について学び、東通村のよいところや課題を学校図書やインターネット、新聞等で調べる。

【本時】

- 導入
- 前時まで調べた内容（東通村のよさ、課題）を全体で出し合い、班ごとに条例のテーマを決定する。

■ 学校図書館活用の視点・工夫、生徒の取組

• 学校司書との連携

選書や東通村の資料作成において、学校司書と連携して作成する。



● 展 開

- 学校図書やインターネット、新聞等を用いて、班で決定したテーマについて調べる。
- 条例案と、その設定理由をまとめ、根拠を示しながら発表する。



● まとめ

- 自分たちの班の条例案や、各班の条例案のよいところ、改善が必要なところなどを評価する。

【本時後】

- 作成した条例案を地方財政や住民参加の視点で、さらに考察する。

● 学校図書館資料の活用

学校図書やインターネット、新聞等を活用して、テーマについて調べる。



● 学校司書との連携

資料の見方や調べ方について連携して机間指導を行う。

● 学校司書との連携

地方財政に関わる本の選書や、東通村の資料作成を連携して指導する。

■ その他の学校図書館活用の取組

1 司書教諭と連携した学校図書館の運営

本校の司書教諭と連携して、図書館の中や廊下に、新刊コーナーや話題書コーナーを設置している。また、学校司書が昼休みの貸出しをサポートしたり、図書館に訪れた生徒におすすめの本を紹介したりしている。



2 司書教諭と連携した図書委員会の活動

図書委員会の提案で、各学級にブックコンテナを設置している。ブックコンテナの本は、図書館にある本の中から、中学生にぜひ読んでほしい本などを、司書教諭が選書している。

また、各学年フロアに新聞や「読売ワークシート通信」を掲示するなど、本だけではなく、新聞にも慣れ親しむ工夫をしている。



■ 成果と課題

1 成 果

- 単元を通して学校図書館を活用し、授業で使用する資料を学校司書と連携・協働しながら作成することができた。
- 資料を読み取る視点が明確でない生徒に対し、学校司書とともに情報活用能力を育成するための適切な支援を行うことができた。
- 図書資料だけでなく、学校図書館にある新聞や雑誌、インターネット等を介して情報を収集し、生徒に有用な資料を提示することができた。
- 客観的な事実に基づいた自分の考えが、図書館資料との対話や他者との対話を通して変容・深化し、深い学びにつながることができた。

2 課 題

- 社会科の授業では最新の(統計)資料等が必要であるが、授業に必要な図書資料を毎年度更新することは難しい。
- 生徒自らが必要に応じて情報を得たり、情報を整理・比較したりする力を育てるためには、教育活動全体で学校図書館を利活用する必要がある。



Ⅲ (6) 中学校国語科 第2学年 単元名「論理を捉えて」 7/7

■ 単元及び題材について

本単元は、学習指導要領第2学年C読むこと(1)ウ、エ、オにより、自分の考えの根拠となる段落や部分などを挙げながら、書き手のものの見方や考え方を自分の考えと対比したり置き換えたりして、読み手が自分の問題として捉えるようになることがねらいである。題材(「モアイは語るー地球の未来」)は、森林資源を大切にすべきという周知の立場を全く新しい角度から述べており、また、自分の主張に説得力をもたせるために、問いと根拠(事実・事例)と主張を分かりやすく結び付けて論を展開している。何を問題にしているのか、どのように論を進めているのかなどを捉え、自分の知識等を関連付けながら、考えをまとめるのにふさわしい題材である。

■ 本時のねらい

文章の構成や展開の工夫、筆者のものの見方や考え方について、学校図書館資料から収集した情報を根拠にして自分の考えをまとめることができる。

■ 学校図書館活用の視点・工夫

筆者の主張に対し、自分の考えを明らかにするための根拠となる情報を集める際、本校の学校図書館の資料を次のように活用し、適宜、司書教諭が助言や指導を行った。

- 環境月間に向けて学校図書館ボランティア等が選書した書籍の貸出し
- 学校図書館に配備されている新聞のコピー、配架図書 of 貸出し



■ 授業の実際

■ 授業の流れ

【前時までの流れ】

- 作品を通読し、見通しをもたせる。
- 筆者の論の展開と主張を捉えさせる。
- 筆者の主張に対する自分の考えの根拠となる情報を学校図書館から収集させる。

【本時】

● 導入

- 前時までの学習を振り返り、本時の学習課題を決めさせる。

● 展開

- 解決方法を集約し、見通しをもたせる。
- 説得力の増す意見の述べ方として考えられることを考えさせる(個→班)。
- 各段落で書きたい内容について、簡潔に付箋紙にまとめ、助言する(ペア)。
- 付箋紙に書いた内容について400字程度でまとめさせる。

● まとめ

- 今後の学習や生活に生かしたいことを発表させる。

■ 学校図書館活用の視点・工夫、生徒の取組

- 環境月間に向けて学校図書館ボランティア等が選書した書籍の貸出し
- 学校図書館に配備されている新聞のコピー、配架図書の貸出し

【学習課題】

筆者の主張や自分で集めた情報を基に考えよう。

- ①筆者の主張に説得力があるのはなぜか。
- ②「地球の未来」について、どのようなことが必要なのか？



学校図書館資料を根拠にしている様子

■ その他の学校図書館活用の取組

1 学校図書館教育全体計画の作成

学校教育計画に位置付け、計画的・組織的な学校図書館運営を明確化した。

2 各教科等年間指導計画への位置付け

研修部・司書教諭と連携し、各教科等の年間指導計画の中に学校図書館を活用する場面を位置付け、「学習センター」として積極的な活用を図っている。

3 学校図書館ボランティアとの連携

司書教諭が学校図書館ボランティアと連携し、推薦図書を紹介や時事問題との関連書籍コーナーを設けている。

4 図書委員会の活動

長期休業前に中学生対象の本の読み聞かせやミニビブリオバトルを行い、来館者全員参加型の企画を実施している。全校生徒の関心が高いことが生徒総会の場で確認された。



■ 成果と課題

1 成果

学校図書館の「学習センター」としての機能を生かした国語科の授業実践を中心に活動した。昨年度は、読書生活を向上させるために、学習の導入における読み聞かせや並行読書、学習の発展として本の紹介を行った。今年度の実践は、自分の考えをより明確かつ根拠あるものにするために、学校図書館資料による情報を活用したものであった。また、学校図書館教育全体計画を作成し、学校全体で利活用を図っていくことを明確にすることができた。適宜見直しを行いながら、具体的な活動を積み重ねていきたい。

2 課題

情報活用能力を育成するための学校図書館のあり方を考えたときに、授業に必要な資料の整備と専門的職員である学校司書の配置が求められる。本校の学校図書館図書標準の達成状況は110%であるが、「学校図書館メディア基準」における配分比率に近付けるような蔵書構成にするために、図書選定委員会による選定基準の設定が必要である。また、学校司書が配置されたときに、司書教諭・学校司書・ボランティアとの連携が図られるよう、役割分担について運営計画に明示しておくことが大切である。

令和元・2年度 学びの質を高める授業改善プロジェクト事業
 学びの質を高める授業スタンダード検討委員

金子依里	教論	平内町立小湊小学校	安保泰仁	指導主事	東青教育事務所
長谷川紘一	教論	青森市立南中学校	佐々木紀人	指導主事	東青教育事務所
新井麗香	教論	五所川原市立栄小学校	浅利忠	主任指導主事	西北教育事務所
成田伊保子	教論	板柳町立板柳中学校	番場亜由美	指導主事	西北教育事務所
建部裕	教論	平川市立柏木小学校	蒔苗尚文	指導主事	西北教育事務所
船水佳子	教論	黒石市立中郷中学校	尾崎徳哉	指導主事	西北教育事務所
森本賢志	教論	十和田市立深持小学校	安田奈津子	主任指導主事	中南教育事務所
中野渡志保	教論	十和田市立甲東中学校	鳴海博史	指導主事	中南教育事務所
久保真一郎	教論	むつ市立大畑小学校	山本保子	指導主事	中南教育事務所
菩提寺学	教論	むつ市立大平中学校	宮崎穰路	指導主事	中南教育事務所
時村陽一成	教論	南部町立名久井小学校	小林忠輝	指導主事	上北教育事務所
佐々木一織	教論	南部町立福地中学校	相馬葉子	指導主事	上北教育事務所
後藤香綾	教論	青森市立原別小学校	原田英治	指導主事	上北教育事務所
福井綾	教論	つがる市立稲垣中学校	中村邦夫	主任指導主事	下北教育事務所
八木橋千佳子	教論	西目屋村立西目屋小学校	杉原憲一郎	指導主事	下北教育事務所
平舘美加	教論	おいらせ町立百石小学校	工藤貴史	指導主事	下北教育事務所
小川侑未	教論	東通村立東通中学校	山本哲	主任指導主事	三八教育事務所
舘美穂子	教論	八戸市立小中野中学校	今田華織	指導主事	三八教育事務所
			滝田敏広	指導主事	三八教育事務所

なお、青森県教育庁学校教育課が編集に当たりました。

課長	長内修吾	総括副参事	佐々木勝規
主任指導主事	山崎浩	指導主事	舘山知昭
指導主事	築舘雅樹	指導主事	三橋央尚
指導主事	淋代秀樹	指導主事	久慈直子
指導主事	中山康人		